

Death Need Round / Round1

Presented by Asaura  
Illustration by Tera Akai



Death Need Round  
Author: ASAURA Illustration: TERA AKAI

アサウラ  
イラスト…赤井てら

OVERLAP

この物語はフィクションです。  
 実在の国名、固有名詞等とは一切関係ありません。

Title  
 contact

## ▽ 1章 『コンタクト』

戦争から四年、紛争から三年……今もなお人々の間で語られる噂がある。

北海道独立戦争において唯一本州に上陸し、猛威を振るった道軍最狂の部隊。そして、泥沼の形相を示していた栃木群馬間紛争を終結させたとされる不死身の部隊。この二つの部隊はどちらも公式記録には存在せず、兵士達の間でだけ語られ続ける噂である。驚くべきはこれら二つの話に登場する者達が、実は同一の部隊であった、という噂もまた存在することだ。

事実、当時最前線にいた兵士達は口を揃えて語る。

——そいつらは特殊な装甲を身につけ、髑髏のようなマスクをつけていた。

硝煙弾雨の中にだけ現れる亡霊、はたまた死した兵士を利用して作られた生ける骸……それら幾つもの名を持つ彼らは実在したのか。そして実在したのなら如何なる者達なのか。長年多くの記者が探し求めた答え——それを、当番組はついに入手!!

噂の真相、知られざる真実の姿……その証拠となる三二枚の写真、今夜ついに公開!!

『秘匿されし伝説 〈幻の部隊を追え!〉』本日二一時よりオン・エアー!!

壁に掛けられているテレビには、ババーン、というチープな効果音と共に若干写りの悪い写真が表示される。特殊な装備で全身を包み、銃を持った兵士達の姿だった。

特番のCMが終わり、今度はハンバーガーショップのCMだ。パンズに挟まる焼きたてのビーフパテ、糸を引くチーズ、熱々なが見るだけで伝わってくるポテト。それらを提示する笑顔が眩しい店員達。バイト募集のCMらしかったが、それと同時に見る者にハンバーガーの魅力をこれでもかとアピールしてくる。

「……お腹空いたな……」

ソファと机、そして毒にも薬にもならない日曜日の午前中の番組を垂れ流すモニターだけの待合室で、葛ユリはすでに一時間以上待たされていた。茶請けの煎餅はとうの昔に彼女のお腹の中に消えていたが、さして腹の足しにもならなかった。

またCMが替わる。『アスニードラウンド』と呼ばれるテーマパークのものだ。それは『研究のために飼われているモルモットが飼育ケースの中で、カラカラ回る車輪を走りながら見る夢の話』をベースにした大人気施設だ。

逃られぬ死から必死に逃れようとしてネズミは一生懸命走るけれど、車輪がただただ回るだけ。まるで迫り来る「死」が車輪を回せと強要しているかのように、ネズミはひたすらに走り、車輪を回し続ける……。

その基本設定は恐ろしくもあるが、実際の中身は愉快なマスコットキャラクターたちがたくさんいて、アトラクションもたっぷりな世界的にも有名になったアメリカ資本の巨大テーマパークであり、子供たちの憧れの場所でもある。元々がモルモットの夢の話ということで、夢の国とも称されていた。

ユリも幾度も足を運んで楽しい時間を送った記憶がある。一日という限られた時間で少しでもキャラクターに会いたくて、一つでも多くのアトラクションを楽しみたくて、彼女もまた車輪の中のネズミのように走り回ったものだった。

そんな時間は、もう訪れることはないだろう。きっと。少なくとも、今しばらくは。ため息が出た。ユリはテレビを見るのをやめ、先日、高校で出された宿題『近代日本における銃器の流通について』というレポートを書くことにした。

要は参考書などの中身をまとめて、何故日本には正規・非正規を問わず大量の銃器が持ち込まれたのかを沖縄でのクーデター、北海道独立戦争、そして栃木群馬間紛争を絡めて書き、最終的に銃器を根絶して平和な国を作るために自分達も日々努力し続けなければならないと締めれば大体マルを貰えるお決まりのものだ。彼女のように高校二年生にもなると、誰もが三、四回は同じような内容を書いた記憶があるはずだった。

別に難しいことは何もなく、あくまで面倒なだけの宿題。そのはずなのだが、今のユリにとってはやや別のところで困難を覚えてしまう。

今、ユリがいるのはその銃器を扱い、合法・非法を問わずに仕事を行う組織の組合所なのだ。そして、自分もまた、これからそこで仕事をもらおうとしているという事実が、彼女のペンを重くしていた。

「……良心が微妙に痛むんだよなあ。ひよつとしてそういう気持ちを使わわせることで、こういう世界に身を置くんじやないぞっていう教育委員会からのメッセージなのかな」  
 飯にそうだったとしても、もはや遅い。すでにユリは訓練を終え、引き下がれないところまで来てしまっている。何よりここを諦めれば自分を諦めなくてはならない。

ユリの借金は死ぬまで股を開き続けるか、どこぞへ内臓を売り飛ばすか——最悪それらの合わせ技でようやく返済といった額なのだ。どれがマシとは言えないが、さすがにまだ己の体を売れるほどの覚悟はなかった。

銃器を扱うといっても必ずしも人を殺すわけではない。そう自分を納得させて、まだ一六歳のユリはこの道に入ることを決めたのだった。

何より、銃を使ってお金を稼ぐなんて何だかカッコイイ。そう思ったのだ。

割り切ってレポートに偽善を書き連ね始めて十数分、待合室の扉が静かに開き、太った男が現れたのでユリはペンを置いた。

山田というユリの担当者だ。日本人にはまず似合わない大きなサングラスを掛け、ま丸い体型をした男だった。

「えー、葛ユリさん。俺の独断だけど、あなたのケツ持ちを決めました。多分、要望だった住み込みってのもOKだと思うよ。それじゃ、案内するから準備して」  
 ありがとうございます！ と、ユリは立ち上がって頭を深々と下げた。

今日から新たな人生が始まる。借金こそ変わらないが、これで返済のメドが立ったというもの。学生と傭兵の二足の草鞋だが、どちらもおろそかにせず、両方を頑張って行こう。葛ユリは未来への希望を胸に宿し、鼻息を荒くするのだった。

「これで、よしっと。うっし、気合い入れて行くぞ」

前髪のを調整し、最後に葛ユリはトイレの鏡の前で己の姿を眺めた。

基本肩口までの髪ながら、左右のサイドヘアだけはやや長めに伸ばした少し変わり種のセミロング。さらに、左右の耳の上に花を模した髪留めでアクセントを置いている。彼女のいつもの髪型ながら、今日はいつも以上に丁寧にセットしたものだだった。

どこか犬のよう、と友達から言われる大きく元気が溢れる目。いくら十代とはいえ、こしはらくの酷い食生活が嘘のように張りのある肌。学校の制服に包まれた体は女性としてのアピールこそやや少ないが、その代わり以前まで続けていた部活のおかげで長く、健康的に引き締まった四肢……。

全体的に年齢の割に色気というものが薄いのだが、それを誤魔化すために今日、ユリは



普段ろくに使わない化粧品で派手になりすぎない程度に薄く顔を飾った。これから仕事仲間になる人達と初めて会うのだ、悪い印象は持たれたくはない。

よしっ、と再びユリは気合いを入れ、手洗い場に置いておいたシオルダーバッグを肩から掛ける。……途端に少年っぽさが増した。胸の間に紐が喰い込み、普通はその形やサイズが強調されて若干セクシーになるはずなのだが、逆に哀れさが漂う。当然それにユリ自身も気が付くが……見なかったことにした。

前向きなのはユリのアピールポイントの一つなのだ。……時と場合によっては単なる現実逃避とも言うのかもしれないが。

多分この場合は後者だと彼女自身気が付いていたが、それは無視した。前向きだから遅くなりましたと、トイレから出るとすぐにビルの地下にある駐車場へ走り込む。

SUVが停まっております、運転席から山田が手招きしていたので急いで助手席に飛び乗った。

「いやあ制服姿の女子高生とドライブなんて、初めてだよ。それじゃ行こう」

車を発進させつつ、アハハハっと、柔らかそうな頬の肉を揺らして山田が笑う。

ユリは愛想笑いを浮かべるのだが、そこでおかしなことに気づいた。

まん丸い山田が先程よりも丸くなっている。分厚い防弾ベストを着ているのだ。

「あの……山田さん、それ、何でスカね……？」

ユリの問いに山田は「あ、そうそう」と言いつつ腕を伸ばし、グローブボックスを開く。

「それ、今、使っているよ。後で返してね。弾はおまけしちゃう！ アハハハ」

グローブボックスの中にあつたのは、ハンドガンとその弾薬。無骨で、何だかグリップ周りに微妙なセンスが漂うポリマー製の黒いセミオートマチック。スタームルガーP95。

え？ と、ユリは今一度山田の顔を見る。今使っている何？ と視線で訴えかけるもの、サングラスの奥の瞳は車の行く先を見るばかりでこちらを気にしていない。

ユリの中で警鐘が鳴り始める。何かがヤバイ。山田のわけのわからないノリのせいで誤魔化されていたが、彼の装備といい、ひよっとするとこれは……いきなりえらい所に連れて行かれるんじゃないのか。

そう感じた直後、それを裏付けるかのように車外の風景が変わり始める。

街を走っている車が徐々に減っていく、Uターンする車、脇に車を停めて顔を出しているドライバー、そしてユリ達とは逆方向に走っていく歩道の人々。

決定的なのは、SUVのエンジン音を貰って耳に入ってきた大量の銃声だ。

「お、松倉の奴、派手にやってるなあ。あれは武島の軽機関銃かな？」

「あの、ひよっとしてこれ……思いつき実践だったりします？」

「あれ？ 言わなかったっけ？ 思いつき実践のど真ん中に行くよ？」

「いつ、言っていないですよ！ これから仕事仲間になる人の所に行くって……！」

「だから、今踏ん張ってる連中がさ。ちよっと応援欲しいって言ってるからさ」

ユリは慌ててグローブボックスの中を漁る。握り取ったP95はやや軽く、弾が入っていないのが知れた。弾薬ケースから慌てて中身を取り出し、それを空のマガジンに押し込んでいく。手に汗が浮き、弾が滑ってうまく入っていかない。しかも一〇発は入るはずだが、マガジンのスプリングが強すぎるのか、それとも焦りのせいなのか、ユリの力では九発以上硬くて入らなかった。もしかしたらすでに一〇発入れたのかもしれない。わからない。

銃声が大きく聞こえ始めたので、最後の一発は諦めた。

ユリはマガジンを装填、スライドを引く。どの銃でもそうだが、弾薬がチャンバーに装填される際の音は不思議と気持ちが良い。たとえ、こんな状況だったとしても、だ。

銃声の中に、ついに爆音までが聞こえてきた。慌てて窓の外を見やれば、消防車やパトカー、救急車すら路上で停まり、何かを無線で遭り取り取りしていた。

片隅とはいえ東京の、晴れ渡って気持ちのいい日曜日の午前中だというのに何だ、この状況は。ユリは徐々に現実味が薄れていくのを感じる。夏休みを利用し、一ヶ月半もの訓練を積んだのに、実戦に行くのだとわかった瞬間から膝がかすかに震えている。

きつと心構えもなく、いきなりだったからだ。しかもグローブボックスに放り込んであるような安い銃しか装備がないからだ。ユリはそう思いこもうとした。

そうでなければ……こんな仕事、続けてはいけない。

山田に電話がかかってきて、SUVは商業ビルの裏手に停まった。

「このビルの地下食品売り場が地下鉄の駅に通じてる。急ごう。ちよつと遅れてる」

山田がSUVの後部座席からMP5を取り出し、さっさと車を降りた。だが、ユリはここで抵抗を覚えずにはいられない。辺りにはまだ、大勢の人がいるのだ。

老若男女が数百メートル先から聞こえてくる銃声に何が起こっているのだろうか。と、疑問を持った顔で路上をうろうろしている中に、武装した山田が平然と歩いていく。

当然のように悲鳴を上げる女性や、逃げようとして転んで泣き始める子供など、一瞬にして大混乱が生まれてしまった。

山田から逃げようとしている人々が銃を握るユリに気が付き、また悲鳴を上げて逃げていく。たまたらユリはショルダーバッグの口を開け、その中に銃ごと右手を差し込んだ。

「こ、これ、ヤバくないですか!?! 超ヤバイですよね!?!」

いいからいいから、ついてきな。山田はまた頬を揺らして言って、ユリをビルの地下へと連れて行く。当然、そこでも阿鼻叫喚の有様だ。さすがに銃を持った警備員が慌てて現れるが、山田は身分証を示すだけで意に介せずメトロの駅との連絡通路へ進んでいく。

MP7を構える鉄道警察が待ちかまえていたが、そこも山田は銃ではなく身分証を掲げることで押し通った。未成年バリバリのユリについて何度か問われたが、小指を立て「俺のコレ! なんつって!」と笑うだけで、スルーだった。

改札を飛び越え、地下ホームへ。トラブルにより運転中止の文字が明滅する掲示板だけ

が唯一の動くものとなったホームに、山田とユリの二人の足音が響く。人気はなかった。  
「松倉、どこだい！ 助けに来たぞ！」

山田がホームに声を反響させた途端、唐突に人影が現れた。

ホームに無数に並ぶ太い柱の陰から現れたようにも見えだが、ホーム下、いわゆる万が一にも人が落ちた場合の、待避エリアに身を潜めていたようだ。

松倉と呼ばれた男は顎髭を生やした、強面な顔つきながらどこか寝起きのような目をした男だった。コンバットブーツにカーゴパンツ、Tシャツの上には黒のタクティカルベスト、それにレッグホルスター、手には近代化したAKと叫び出した出で立ちだ。

マガジンのカーブ具合からするに小口径高速弾を用いるAK74ではなく、大口徑の弾を使用するAK47の系統なのだろう。それら二種は外見がほとんど同じなのだ。

その銃のレールの上にちよこんと載る小型光像式照準器が、ちよつとかわいらしい。

ふと、ユリは松倉の腕に貼られていた部隊章に目が行く。半面髑髏、半面ジャック・オー・ランタンジャック・オー・ランタンの顔が描かれたそれは、ユリに少し早いハロウィンを連想させる。

「ここだ。……山田さん、話が違う。楽な仕事じゃねえよ、これ。影武者に喰い付かずに、完全に敵主力が俺達に向かって来たぞ！」

「正規の警備を丸ごと偽者につけりゃさすがに欺けると思ったんだけどなあ。ごめんごめん。んで、護衛対象は？」



やる気がないように喋る松倉と、笑うように喋る山田の二人の会話は、一步引いて聞いていると飲み屋かどこかでそのそれのようだ。間が抜けた、という感じなのだ。

待避エリアから薄汚れたスーツの男がはい出てくる。これが護衛対象なのだろう。

「よし、それじゃさっさと逃げよう。えーっと、大野と武島は……死んだの？」

「いや、敵を引きつけるために囮として地上で踏ん張らせてる。俺とVIPだけ、地下に潜って一駅分、路線を走ってきた」

「どうりで待ち合わせが地下なのに、外で銃声が聞こえてたわけだ。捨て駒扱いかあ」

「ヨーヨーみたいな連中だからな。投げても戻ってくるさ。万が一ってことになっても、敵にヤンとマーの双子が雇われてるんじゃ、仕方ない。アイツらは相変わらずいい腕だ。

……それよりその未成年は何だ？」

ああ、と山田がユリの顔を見た時、全員顔に緊張が走った。潜めた足音が、かすかに聞こえてくる。複数だ。線路の先、暗闇の中から近づいている。

「葛さん、VIPを連れて俺の車に行つて、逃げちゃつて。当然、銃を出して。何もなしと思うけど、万が一の時は発砲して。いいね？ はい、すぐに行つて。これ鍵ね」

「未成年に銃を持たせるなよ。誰がどう見たつて非合法だぞ」

「松倉達の得意分野はそっちだろ？ 今更言いつこなしだつて。それに女子高生の非合法傭兵なんて客にウケるよ、きつと。アハハハハ」

足音が近づいてくるということは即ち、武装した敵が来るといことだろう。それなのに平然と喋る二人に、ユリは得体の知れない気持ち悪さを感じた。

しかし会話こそ日常のそれだが、二人の体は自然に銃床を肩に寄せ、重心を落とす、臨戦態勢に入っている。いつそうなったのか、見ていたはずのユリにすらわからなかった。

二人はあまりに当たり前に、日常の中に非日常の行為を織り交ぜている。

山田に促され、わけがわからないままユリはスーツの男の腕を取った。すでに顔に生氣がなく、スーツのパンツには失禁の跡もあったが……気にしている場合ではない。

銃声、フルオートだ。線路の奥から飛来したそれは明らかにユリを狙っていた。初弾が近くの柱に着弾し、反動を抑えきれないのか、弾着が上方へ這う。柱の破片が散る。腰が抜けそうになって、スーツの男共々床を転がった。

松倉達がそれぞれ違う柱に身を隠しながら、応戦開始。セミオートの速射による9ミリ弾と7・62ミリ弾、二種類の銃声がリズムカルに響く。ホームに轟くそれが、耳に痛い。

遠くからうめき声が上がリ、松倉か山田の弾が有効弾になったのだと知れた。

そんな戦いを背に、ユリは立ち上がり、走った。失禁男の腕を引っ張り、一路地上へ。階段を駆け上り、改札口へ。そこに突っ立っている鉄道警察はいい装備をしているくせに一切動こうとしない辺り、今の日本の有様を示していた。

ここに来る道中も、警察などは路上に止まり、あえて現場に急行しようとはしていない



かった。——危ないからだ。法や制度が現実には追いついておらず、日本の警察に支給されている火器よりも、犯罪者や民間人が個人で持つ銃器の方がはるかに高性能であり、また使用者の練度も高いのが昨今の有様だった。そのため一般の警察官は銃撃戦が起こった場合、あえて動こうとはせず、一段落が付き、さらに応援が大量に駆けつけてから行動を起すようにいつの時代からか切り替わってしまった。

だから、ユリのような十代の子ならば幼い頃こころから『銃声が聞こえたら逃げなさい。誰も助けてくれないんだから』と言われて教育されるのが普通である。

銃を持った女子高生と、失禁男の組み合わせが果たして第三者からどのように見えるのか知らないが、連絡通路を抜け、地下食品売り場に到達すると、まだ店内にいた客たちが慌てて左右に分かれ、道を作ってくれる。その間をユリは走った。

もうどうにでもなれ、という気持ちだった。

山田のSUVまで戻つてくると、男を後部座席に押し込み、自分は運転席に乗り込む。

運転は最低限動かせるよう習った程度だが、問題はないはず。そう思ったのだが、何かがおかしい。……この車、マニュアルだ。

「うっそ、私ATオートマじゃないと無理だつて！ オジサン、出来る!？」

後ろを振り返ってみるものの、失禁男は青い顔でガタガタ震えるばかりだ。一か八かエンジンンを掛け、発進させてみようかとチャレンジするものの、すぐにエンストしてしまう。

ハンドルに置いたユリの両手が焦りに震えそうになった。だがそんな時、ビルの中から二人の男が後方に銃口を向けたまま——こちらに背を向けた状態で現れる。山田と松倉だ。ユリにはその三十代前後のデブと顎髭の男が天使のように見えなくもなかった。

「葛さん何やってんの!?! もういいから早く、助手席行って！ 松倉ももういいから、早く乗れて！ もう撃つなって、一般人に当たったらどうするつもりだい！」

「その時はもう一回撃つさ。どうした、ほら、早く出せよ！」

山田の方はさすがに慌てていたが、後部座席に飛び乗る松倉の方は先程と変わらず落ちていた口調だった。

車が走り出すと同時に完全武装の男達がビルから飛び出して来る。走り去るSUVに気づき、銃を構えた。

だが、彼らの銃弾が飛来する前に山田はハンドルを切って道を曲がり、その射線から何とか逃げおおせたのだった。

「アハハハ、今のはちょっと危なかったなあ」

「山田さん、俺達の今回の仕事は今日で終わりだったはずだよな？ 契約の延長はなしだ。内通者がいる護衛任務は趣味じゃない」

「わかっている、そっぴろげのが得意な連中に回すよ。代わりといっちゃ何だけど、さつき入ってきた面白い仕事があるんだ。どうだい？」

「子供の面倒を見ろっていうんならお断りだ。人手が欲しくなったら昔の仲間を呼ぶ」  
 「そう言うなって。応援が欲しいって言ったのはお前だろ?……え? 何、そういう意味じゃない? 知るかい、そんなん。アハハハ! とにかくさ、この子、親の借金のせいでまともに生活も出来ない状態なんだよ。松倉んとこは、ほら、女性メンバーいるし、詰め所は広いし、いいだろ? それにお前んトコはメシがいい。喰わせてやってくれよ」

明らかに断ろうとしていた松倉が、最後の「メシ」のことが出た瞬間に口を閉じた。ほら、と、山田がユリの太ももを叩く。

今のようなのが仕事だというのなら、正直もう嫌だったが、車内の雰囲気はすでにそれを言えるものではなかった。彼女が言える言葉は、もはやただ一つしかない。

「あ、あの、よろしくお願い……します……」

松倉が首を振り、何か言おうとするのだがそれを山田が遮る。

「まっ、それはそれとしてだ。どうだい、面白そうな仕事、やる?」

「こいつを預かるって話がそれじゃなかったのか」

「借金まみれのこの子の面倒見たってどこからお金が入ってくるんだい? そうじゃないよ、もつと、松倉達にピツタリな……ヤバイ仕事さ。ギャラもいいんだこれが」

「そうだな。大野と武島（合し）が五体満足で帰ってきたら……考えるよ」

それはやるってことだね。山田はそう言って、笑った。

「葛さん、そんな不安そうな顔しないでよ。初陣はね、ヤバイ方がいいってというのが俺の持論。それで生き残れるなら今後しばらくは大丈夫だよ。頑張ってね」

「……初陣で死ぬってことは……?」

スッゲーよくある! と山田はまた笑い、ユリのテンションを地の底に突き落とす。

「そういうわけでき、仕事をする上でちょっと質問があるんだ。松倉、葛さん……ハンパーガーは好きかい?」

## 1

ユリは信じられない物を見るような目で、ゴクリと唾を飲んだ。目の前に用意されていたのは、ここしばらくの食生活からでは考えられない代物である。

かき揚げ丼だ。二センチを越える厚さのかき揚げが堂々と丼（どんぶり）に載せられており、下の飯を隠しきっている。揚げ物特有のうまそうな匂いがヤバイ。とにかく、ヤバイ。そこに甘じょっぱいタレの匂いが混じるのだから、すぐにでも箸を差し込みたくなる。

ユリは目の前のそれから視線を外し、違うことを考えることにした。

そこは、足立区（あだち）にある倉庫のような一軒家だった。というか、恐らく倉庫だったのを改築したと思しき建物だ。ちょっとした体育館くらいはありそうな広さで、水回りこそ家の

奥に扉と壁で区切られているが、それ以外はパーティションで区切るようなこともせず、だっ広く使用していた。冬になると寒そうだ。

土足OKのコンクリートそのままの冷たい床、部屋の中央には大きなカーペットが敷かれ、その上には大きなちゃぶ台が一つ。そして、昨今銃器を扱う犯罪が多発しており、最近では何故か特定のバーガーショップのバイトが狙われて云々といったニュースを垂れ流す大型のテレビがその近くに置かれ、それと繋がる配線はうねる無数の蛇のように乱雑に伸び、壁の中に吸い込まれていた。

またそんな壁をロッカーや調度品の収まった棚、何かの作業台などがズラリと並んでそのほとんどを埋めているのだが、それらはカーペットの上からでは手が届きもしない距離である。まるでワンルームの部屋をそのまま巨大化させてしまったために逆に使い勝手が悪くなってしまった感じ……というのがユリの感想だった。

仕切り板か何かで程よいサイズに区切った方が使い勝手がいいだろうに。そう考えずにはいられない。とはいえ開放的な高い天井と、そこに付けられた眩しい程の照明は、悪くない。落ち着くかどうかは別として、だが。

少し気になったのは土足エリアの片隅に、一对のソファが机を挟むように設置されていることぐらいだろう。そこだけまるで応接間か何かの調度品を持ってきたかのようだ。匂いがユリの顔を惹きつける。ヤバいと思ったが腹が鳴ってしまう。

しかし、それと同時にギギギという嫌な音を立ててその玄関……というよりは倉庫そのままの大きなシャッターが開き、運良く腹の虫のいななきは打ち消されたのだった。

「おう、生きて帰ったか。丁度いいタイムिंगだ。銃のクリーニングは後にして、先にメシにしよう。双子は堕とせたか？」

部屋の奥にあるキッチンスペースから顔だけ出し、松倉は声を響かせた。

シャッターから現れたのは、武装した眼鏡の男とび割れたサングラスの女。

「いや、ダメでしたね。やっぱあの二人ムチャクチャ強いですよ、今回の装備じゃいろいろ足りなかったです」

眼鏡を掛けた童顔の男が応じる。彼の背には巨大なリュックサック、肩からはモスバークM590がブラ下がついて、まさに戦場帰りといった雰囲気格好だ。だが、そこいらにいそうな、何だったら大学生か高校生と言っても通じそうな顔つきをしているため、見ていると何だかおかしな感じがした。

モスバークを玄関横にあるロッカーの中に無造作に放り込み、彼はそこから取り出したオールド額から流れていた血を拭いた。

「煙草切れたんで、帰ってきたわ。あともう一箱あれば、ヤンの方ぐらいはどうにかかったと思うんだけど」

もう一人の女が言った。これもまたおかしな女だった。手にはベストと、ドラムマガジ

ンを差したままの軽機関銃。それはほとんどAKを引き伸ばしたような、一メートルを超える細長いデザインのため、日本人の体格には不釣り合いなものだが、彼女には不思議と詭えたように似合っていた。

それは手足がスラリと長く、一八〇センチを超える長身のおかげだろう。また体はただ細いだけでなく、引き締まり、かつ、しなやかなラインであり、そのくせして出るところは出ているのでほとんどモデル体型だ。肌も、驚くほど白い。白色人種の血がいくらか入っているのかもしれない。サラリと真っ直ぐな長い彼女の髪の毛も金髪……ではなく、黒毛を金髪に染めたものをほったらかしているのか、少々プリンのようになっていた。

彼女はRPKを大野に投げ渡し、さらにサングラスをロッカー横のゴミ箱に放り込む。肉食獣のような深みのある吊り目が現れ、それがユリを捉える。ゾクリと来るような、そんな目だった。狐や虎や狼の魔性を宿したそれをユリは思い出す。身がすぐむようだ。

彼女は訝しげにユリを見ながらブーツを脱ぎ、カーペットに上がる。ピッチリとしたジャンズの膝を覆っていたパットを取ってどこぞへ放り投げると、ユリの隣に座った。彼女の全身にこびりついている硝煙——いや、雷管の匂いが、かき揚げのそれを押しやった。

「あ、あの……私、こちらで厄介になることになりました、葛ユリといいます。一六歳です。アピールポイントは『前向きなところ』で、あ、そうだ鞆の中に履歴書が……」  
脇に下ろしていたシオルダーバッグから慌ててフォルダに挟まる履歴書を取り出すもの

の、一瞬目を離した際に……女はかき揚げ丼を貪り喰っていた。ユリの、それを、だ。

——絶叫。即座にキッチンからキンバーのガバメントを握った松倉が顔を出し、ロッカーで血を拭っていた男が驚くべき速さでショットガンを再度手にし、構えてみせた。

「わ、私の……私のかき揚げ丼がああああああ……」

もぐもぐと子供のように頬を膨らませて咀嚼する武島がポカンとした顔をする。

「……松倉、これ、悪いのアタシ？」

「世間一般じゃな。ユリ、先に喰ってると言っただろ。冷めると味が落ちる。揚げ物は揚げ立てが一番だ。その頭のネジが外れた女は……武島は、それを気にしてお前の分を——」

「いや、単に腹減ったからだけど。とりあえずビールくれえい」

お前はもう黙ってる、と松倉はのっぺりとした口調にかすかな苛立ちを込めてキッチンへ戻って行くも、すぐにお盆にかき揚げ丼と味噌汁、そして缶ビールを三人分、さらに漬け物の小鉢を載せて現れる。

目の前に新しいかき揚げ丼が置かれ、ユリの心が震えた。松倉と眼鏡の男も座り、彼らがビールで無言の乾杯をするや否やユリは躊躇うことなく箸を持つ。

遠慮している場合ではない。奪られるぐらいなら失礼覚悟で掻き込もう、そう思った。

松倉達が喉を鳴らしてビールを飲み続ける、そのゴクゴクという音をBGMに、ユリの箸は丼に襲いかかった。



箸先でかき揚げを押し切ると、ザクツという音。万感の思いで頬張れば、その快活な音が今度は口内で鳴り響いた。

素人が作るとうしてもべっちょりとしてしまうかき揚げだが、これは見事だ。揚げ立てというせいもあるだろうが、分厚いかき揚げは全体が軽やかに仕上がっている。厚いが、衣は少なく、小エビ、細切りにしたニンジン、ゴボウ、玉ねぎの具材を繋ぎ止めるにとどめているが故に、かき揚げは格子状に形成されていて、見た目のインパクトほど重くはない。また、だからこそ全体に満遍なく油が回り、ザックリと見事に揚がっていた。

また松倉の工夫もうまい。このかき揚げ、半分だけとろりと甘い天井のタレを纏っているも、もう半分にはかかっていない。だからこそ、その至福の食感をたっぷりと楽しめる。タレを含み、柔らかくなっていくかき揚げと共にご飯を頬張るのもいいが、揚げ物の醍醐味である食感も失いたくはない。そんな要望を満たしてくれる。当然そうなると味が薄くなりそうなものだが、かき揚げを載せる前にタレをしっかりご飯にかけてくれてる心遣いが嬉しい。

ただのかき揚げとご飯だけでも嬉しいのに、それがこんなに丁寧な気遣いのある料理だ。口いっぱい頬張り、それが喉を通り抜ける時、かすかに目に涙が滲んでしまう。

「ああーっ！ と、武島が缶ビールを一息に飲みきった。

「あーうめえ。仕事終わりの一杯は効くわ、やっぱ。……あっ、忘れてた。で、松倉、コ



イツ何？ 大野がついに童貞捨てるためにどこから拉致<sup>らうち</sup>って来たの？」  
 「ひ、酷<sup>ひど</sup>いな。ここのずっと一緒にいたくせに、そんなことするわけないだろ」  
 「うるせえ、口答えすんな。百年早い。童貞臭え顔しやがって」

童顔の眼鏡の男は、大野で童貞というところしかかった。だが、ユリには今、どうでも良かった。おいしいものを口いっぱいに噛みしめている時に、余計なことを考えたくない。おいしさだけを、今は感じていたい。

タレのかかったかき揚げは、食<sup>は</sup>めば揚げ物の香りと共にタレが染み出て、ゴボウやエビの風味が漂う。ご飯が止まらない。タレ漬けなしの部分は食べるにザクリと気持ちが良い……それはもう、快感だった。んふう、と鼻息と共に満足気な声が漏れてしまう。

また、口の中をさっぱりさせる浅漬けもいい。白菜とミョウガという組み合わせのその風味がいい。爽<sup>さわ</sup>やかだ。

「山田さんから押しつけられた。借金まみれなんだそうだ。しばらくうちで面倒見ることになった。そこに落ちてるのが履歴書だな、武島<sup>たけしま</sup>も暇なら見ておけ」

「うげっ、面倒くさいなあ。えーっと、なに……クス？」

「あ、それ、ツヅラって読みます。ツヅラユリ、です」

「クズじゃん」

「……まあ、そうなんですけど」

ツヅラ<sup>ツヅラ</sup>、という苗字<sup>みょうじ</sup>は少し珍しく、大抵の人の場合はクズか、葛飾<sup>かつしか</sup>区からカツだと読むが、ユリの家系ではツヅラと読んだ。

「未成年なんだし、そこいらで股開<sup>また</sup>いてりやそこそこ金入んでしようが」

「……それはちょっと嫌で……。あと、生半可なやり方じゃ、全然足りなくて」

それで喰<sup>く</sup>うに困<sup>こ</sup>ってこんな所に、か。大野がボソリと呟<sup>つぶや</sup>くと、哀れみの目をしながら、手を付けていなかった己のかき揚げを丸ごとユリの丼<sup>どんぶり</sup>に載せようとしてくれる。

ああ何ていい人なんだろう！ 一瞬にして好きになってしまいそうな気持ちを胸に、ユリは大野からの施しを素直に受け取ろうとする。だが、大野の手を松倉が止めてしまう。

「かき揚げと飯のバランスが崩れる。お代わりはある、そういうことはやめろ」

「そうだぞ、大野。そういう行為<sup>ゐゐ</sup>で安易にヤれると思ってるからいつまでも童貞なんだ」  
 大野がショボくれた顔をして自分の丼にかき揚げを戻した。

お代わりがあると聞いて、ユリは大事に食べていたかき揚げ丼をさっさと腹に押し込むと、早速二杯めを貰<sup>もら</sup>う。自分でやるつもりだったが、ビールを持ってくるついでだとして松倉がやってくれた。

「案外よく食べるね、アンタ」

「私、結構燃費が悪いんです。それにこんなにおいしいんですから、つい。……最近はおカラとパンの耳とかしか食べてなくて。だから、本当にこれ、最高です！」

大野と武島の二人はさすがに眉根を寄せてユリの顔を見てきた。

「ほれ、お代わりだ。いっぱい喰っとけ」

ワーツと、ユリは喜んで松倉からお代わりを受け取ったところ……驚いた。ご飯が大盛りになり、かき揚げが二段重ねだ。

い、いいんですか!? ユリは思わず叫ぶように言い、松倉の返答が来るより先にかき揚げの山に齧り付いた。あまりの幸せに、たまらず涙が零れた。

「松倉、お前、料理うまいって言われて嬉しかっただろ」

黙って喰え。松倉は寝起きのような声で、ビール片手にニヤニヤ笑う武島に言った。

そんなユリにとって数ヶ月ぶりの真つ当な食事を終えてから数十分後、来客があった。

ゴツイ体にゴツイ顔の男。彼こそ山田が言っていた、面白い仕事への依頼主だった。

松倉達は挨拶より先にあの髑髏とカポチャの部隊章を見せると、彼はどこか苦々しい顔で頷き、仕事の内容を話し始めるのだった。

有名バーガーショップである『ワックマインド』、通称ワック。そのマスコットキャラクター、ロナウダ・ワックマインドを殺して欲しいのだ……と。

## 2

「……え？」

ユリは信じられない物を見るような目で、ゴクリと唾を飲んだ。目の前に用意されているのは、ここしばらくの彼女の食生活からでは考えられない代物である。

ハンバーガーだ。それも、先程かき揚げ丼を限界まで胃に収めた直後だというのに、ユリの前には大量のハンバーガーが山積みで置かれているのだ。

貧しさが極まって自分は夢でも見ているのではないか。そう思って周りを見渡すが、何もおかしいことはない。そこは銀座のデパート店内にある日本における旗艦店のワックであり、ユリ達がいるのはその店内一階の片隅にある四人掛けテーブル席。そして目の前には大量のバーガーとポテトとコーラである。

……え？ と、今一度ユリは眩き、先程食事を終えたばかりなのに平然とバーガーに齧り付く松倉達を見やった。

「ユリ、遠慮しなくていいぞ。これも経費だ。好きなだけ喰え。値段なりにうまいぞ」

松倉が喰いながら言うと、四口でバーガー一つを平らげた武島が不満の声を上げた。

「ワックはたまに無性に喰いたくなるんだよなあ。つつうかさ、松倉、経費だつつうんな

ら、何でもこんなノーマルなバーガーとか、チーズバーガーばっかなわけ？ もっと他のバリエーションにしろよ。何か、物足りない」

松倉はともかく、武島は先程ビールを四缶、さらに自分同様かき揚げ丼をお代わりしていたはずなのだが……。何かがおかしい。しかし唯一大野だけはユリと同じ気持ちらしく、ノートPCを開きながら、辟易した顔でポテトをつまむばかりだ。

ただ、そのポテトとて極論的に言えば油と炭水化物の塊であり、とてもじゃないが、これもユリの喉を通る代物ではなかった。辺りを占める油の匂いが酷く胃を重くする。

貧乏になる前からして大食いだと自称していたユリだったが、ひよっとしたら井の中の蛙かまづみというやつだったのかもしれない。

「あの……私達って、何しにここに来たんですかね……？」

「さっき説明しただろ。仕事だ、お前の初陣だ。ただ今回はまだ事前調査だな」

「え、ええ、わかるんです。わかるんですけど……何故ここでバーガーを？ それにあの依頼もどこかおかしいですよ。何だか言っていることが滅茶苦茶でしたし」

依頼は、様々な意味で常軌を逸していた。

ロナウダを殺して欲しい。それも銀座店にいる、オリジナル・ロナウダを……。

バーガーショップのマスコットキャラクターを殺す、それがどういう意味なのか、正直ユリには理解しかねた。ただここ一ヶ月ほど、全国のワツクのバイトが次々に殺害されて

いるというニュース報道が頭を過ぎりよはした。

もしかしてそれと何か関係があるのか。だとしてもバイトとロナウダというキャラクターでは何かが違うはずだ。

松倉はバーガーを食べ終えると、続けてチーズバーガーに手を伸ばす。

「山田さんの方からの依頼書を見た。喜べ、お前の初陣はかなりヤバイぞ。察していると思うが、これは表の仕事じゃない。俺もさっき山田さんに確認したが……依頼主の方から、荒仕事に特に慣れたチームを、という指定があったそうだ」

「並のトコじゃ手に負えない仕事ってわけですね、オレ達にお似合いだ」

「仕事は非合法に限る。わかる、ユリ？ この手のはね、どんな手段でも使えて割がいい。依頼主に背中を撃たれるのだけは怖いけど、そこは組合の人間がどうにかする。そうやって助けあって、大きく稼ぐのがウチらの仕事」

武島がそうざりとまとめるのだが……如何せんいかんそんなことはどうでもよく、ロナウダ云々というのがユリにとっては理解出来ないところだった。

「ユリ、アンタはアンタの知っている事だけが世界の全てだと思わないように。一般人が知っているのは世界の表層だけで、その夜は信じられない程深くて濃いもの。……以前、似たような仕事を受けたこともある。あれはまあ真正銘の化け物だったけど」

「そ、それってどういう……？」



武島に疑問を投げかけようとしたユリの言葉を、松倉が遮った。

「ただユリの言い分はもっともだ。オリジナル・ロナウダ……依頼主曰く、全国にいるロナウダと銀座店のロナウダは別物だと言っていたが、その意味するところまでは説明されなかった。ただ殺せ、だ。そのくせしてあの提示された額は尋常じゃない。どこぞの護衛付きの重役を殺せつつ依頼でもここまでじゃないだろう」

「それなんですけどね、松倉さん。どうも、最近報道されている件と関係があるかもですよ。……テレビでは報道されていませんが、昨今のワックのバイト殺害ってのは……みんな、イベントでロナウダに扮装かまうしていた奴らやつらみたいです。その殺害方法ってのも、それなりのプロみたいで」

「だが、あれは全国での話だったはずだ。そうすると俺達のようなどこぞの組合に登録してる個人事業主がやれる仕事じゃないな。……もっとデカい組織になる。その関連性も調べるよう、山田さんに連絡しておけ」

まっ、とりあえずは様子見かな。武島が呟き、壁へ視線を送る。ユリも釣られるようにしてそれを見やると、そこには『毎週日曜日、お店にロナウダがやって来るぞ！ 楽しい仲間、みんな集まれ〜！』というポップな文字と共に、ロナウダのイラストが描かれたポスターがあった。

どうも銀座店は旗艦店ということで、他とは扱いが違うようだ。他店ではせいぜい都内

であつても数ヶ月に一度ぐらいしかないイベントが、ここでは週一で行われるらしい。

ロナウダ来場イベントは午後二時から。あと数分だ。広い店内の一階席のそこは、小学生の低学年からまだ赤ん坊まで、二〇人以上の子供と、それらの保護者という、まるでヒーローショウのステージ前のような有様になっていた。実際、先程から甲高い子供のわめき声や笑い声で騒々しいといつたらない。

子供連れ以外の客は、ユリ達だけだ。他の一般の客はイベントと関係のない二階席に向かっていく。何も知らずに入店してきた者も、子供のうるささを一目見ればすぐに階段を探すほどだ。……そのため、ユリ達のグループはいささか浮いていた。

松倉が入店時に、未成年だというのが明らかな制服姿のユリが居れば場に馴染むだろう……と言っていたのだが、全然馴染んでいなかった。

一階席ということもあり、大きな窓で外から丸見えだ。かつ、松倉達はその窓際の席なのだ。通りを歩いていく人々が子供達の姿に頬ほおを緩ませた後、無愛想な顔でひたすら大量のバーガーにパクつく松倉達を見て眉を蹙しりぞませていく。尋常ではない目立ち方である。

「……いきなり、ドンパチって、やらないですよね……？ こんな子供が大勢いる中で」「さすがにやらないっての。今言ったように、事前調査。とりあえずオリジナル・ロナウダとやらを見てみましょうってわけ。……でもあのガキ共、うるさくて二、三発撃ち込んできたりたくなる。……何で最近はどこもかしこも禁煙なのかなあ……あーもう！」



ロナウダの目が、鈍く光り、彼は席を立った。

「ようし、それじゃ……そろそろやっちゃおうかな。みんな、お待ちかねだよね」

子供達が待つてましたとばかりに再び歓声を上げ、親達が拍手をする。

「いくよ……ロナウダ・マジックス!!」

ユリは我が目を疑った。ロナウダ・マジックス。それはテレビCMなどで何度か見たことがある。ロナウダが行うと、チープなCG、もしくは合成映像で、子供達が楽しくなってしまう不思議な現象が起こる……というものののだが……。

ユリ達の机の上にあったバーガーの包み紙のゴミが……白い花に変わったのだ。それだけではない、次々に客席の上で奇跡が起き始める。ゴミが花に、天井に星々がきらめき、そして店内には冗談のような虹がかかる。それは、ユリがテレビで見たその映像をそのまま現実にしたかのような、そんなあり得ない光景だった。

これにはさすがの武島も呆気にとられ、口を開けて店内にかかる虹を大野と一緒に見る。唯一、松倉だけが分解したバーガーを手にしたまま、眠そうな目で窓越しに歩いていく通りの人々を見やっていた。

子供達がロナウダに駆け寄ってきてその手を取り、自分達の席へと引っ張っていく。ロナウダはその微笑みをユリ達に向けて何か言いたげな視線を残し、席を離れたのだった。

「……す、凄いですね。何々ですか、これ」

「さあな。だが、ゴミを花にして虹を作り出せるからといって、俺達の仕事に変わりはない。……大野、店の裏に行け。イベントは三〇分だけだ。奴が店外に出たらどこに行くのかを突き止めろ」

「あれ？ それじゃ何、松倉、一気にやるわけ？」

「わからん。何もかもがな。だから、とりあえず当たってみようと思う。……今夜だ」

松倉はテーブルの花を一つ手に載せると、携帯電話を取り出してパシャリと撮影したのだった。

### 3

「何でもまたアンタはこんな仕事しようと思ったわけ？」

武島が運転席のシートを最大限に倒し、煙草を吹かしながら言った。すでに空は夜が覆い、彼女らが乗るワンボックスカーもまたその煙草の赤い火以外、そのほとんどを黒が塗りつぶしている。

ユリは何だか今朝よりもくたびれたように感じる制服の胸元に手を当て、その心中を語る。家族が自分を残して失踪したこと、借金取りにいくつかの選択肢を突きつけられた時、この道に行くことを決断したこと……。

「それで元米軍の兵隊さんがやっているところで、特別教育課程カリキュラムをクリアして……それで山田さんがいる組合を紹介してもらったんです」

親の借金と言っても、ユリの家族がしたものではありません。夜逃げした親類の保証人になつていたせいでも、とんでもない額の借金が一夜にして降りかかってきたのだ。

それは大きな問題だが、しかし大したことはない。本当の問題は家族が自分だけ置いて姿を消したという事実だった。思い出すに胸が苦しくなる。何とかしようと思ひ、自分を騙だますように、現実逃避するように、前向きで生きていこう、それだけを胸に抱いてやってきた。うまく働けばきつと全額返せるはず。そうしたら失踪した家族を捜して、どうして自分を置いていったのかを問い詰め、謝罪させ……そして、また一緒に暮らすのだ。

それを考えた時、銃器の扱いや、実質裏側の仕事を半ば公式に請け負っていると有名だったあの組合は都合が良かった。借金取りから身を隠した家族を捜すには表からのアプローチだけでは無理だというのは、さすがにユリにもわかつていた。

ユリが様々な想いを込め、一通りのことを語ると……武島は腹を抱えて笑い始める。ユリの気持ちを踏みにじるようなそれだったが、しかし、怒りよりも何より、驚きの方が上回った。どこにも笑うようなところはなかったはずだ。

「松倉あ、アタシようやく読めたよ。何でコイツがうちに来たのかさ」

ああ、俺もだ。後部座席——といっても運転席と助手席以外のシートは全て撤去されて

いるのだが——から松倉のくぐもつた声が聞こえてきた。

「アンタに銃を教えたトコの教官って、アルバートって男だったでしょ。……うん、やっぱりね。そうだと思つた。相変わらず、あそこアクドイ商法してるなあ」

「え、何ですか？ そんな、先生のことを悪く言うのはやめてください！ 先生は、凄くいい人で、いつも私のことを考えて居残りの訓練とかまで付き合ってくれて……」

「そりゃ商売だからね。どうせ、アンタも銃の目隠し分解とかさせられたクチでしょ？」

「はい、私センスがあるって凄いい褒められたんですよ。もちろん先生ほどじゃないですけど、新人じゃ考えられないぐらいに速いって言ってもらつて」

「まともな教育課程カリキュラムに目隠し分解なんてあるわけないじゃん」

え？ と、思わずユリは耳を疑つた。アルバートは銃の構造、扱いを完璧かんぺきに頭に叩き込むにはこれが一番いい方法だ、というようなことを真面目まじめに語っていたのだ。

松倉が鼻で笑う。

「目隠し分解なんて皿回しが出来るって言っているのと同じようなもんだぞ。見ずに速く出来るからってどんな意味がある？ 目隠しで速く出来るより、目を使つてもっと速くやる方がずつといい。スポーツじゃないんだ、使えるものは全部使って最大スペックで事に当たるのが当然だろう」

きつと目がやられた時を想定して……！ と、ユリは反論しようとしたが、直後に目が



使えないなら銃も使えないことに気が付いた。

「で、でも、軍にいた時は毎日のようにやって銃に親しんだって」

「アイツは米軍にいたはずだが、訓練に目隠し分解なんてないぞ。毎日のようにするのは仲間内で遊びでやってたんだろ。何より狭くてジャングルもない日本国内での戦闘を考えれば、急ぎで分解や組み立てを要求される状況なんてそうあるもんじゃなしな。あの紛争でさえ、前線から五キロ後方に下がればジジイとババアが孫と遊んでたんだ。敵地のど真ん中で、何の支援もなしに孤立するような状況なんてまずあり得ない。文化、人種、言語……それらが基本的に統一されているんだから、最悪、装備を捨てれば敵側だろうが何だろうが平然と街でハンバーガーが食える」

「……えっと……じゃ、何であんなことを……」

「素人相手なら凄そうに見える。威厳が出る。アルバートはそういうのが好きだからな。それに教育課程がスツカスカだったら、金が取れない。……ああ、聞いてないかもしれないが、多分かなりの教育料がお前の借金に上乘せされているはずだ、確認しておけ」

「今の松倉のにアタシから付け加えると、アンタ、やる前に何枚も書類にサインしたんじゃない？……やっぱり。多分、その大半がスクールのじゃなくて、保険関係だよ」

つまり、借金取りの思惑はユリが考えていたこととまったく違うのだという。てっきり辛い現場で働いて返せということかと思えば、そうではなく……死ね、ということらしい。

松倉が語るところによれば、恐らく今現在ユリにはかなりの額の保険がかけられており、これを借金取り達が手に入れるためにあえて危険の多いこの職を勧めたのだという。そして恐らく山田もグルであり、早めに保険金を回収するために、ヤバい仕事を好んで引き受ける松倉チームにユリを送り込んだ、ということらしい。

「ということはアレですね。葛さんと一緒に送られてきた今回の仕事って、相当にヤバいってことですね」

「大野、お前にしては珍しく冴さえているな。きつとそういうことだろう。ユリが死ぬのを見込んでの仕事だ。……いいぞ、テンションが上がってきた」

言いながらも、松倉は相変わらず平淡へんたんな声だった。

「ちょっと待ってください！ そ、そんなのって……!! 山田さんも先生もそんな人じゃないです！ 思い込みでそういうふうに言わないでください！」

「諦めなよ、ユリ。アンタが考えている程、人間は善良じゃない。お金が貰もらえるなら人はいくらでも優しくなれる。……つつうかね、本当の善人なら仕事紹介する前に弁護士紹介するよ。まあ、もうアンタの場合、先に手を打たれて自己破産も何も出来ない状態になっているだろうけど。そもそも未成年なんだし、逃げ道はいくつもあつたはずだからね」

愕然がくぜんとするユリをよそに、後部座席にいる松倉と大野の準備が終わる。振り返って見れば……そこには全身黒くろすくめとなった二人。

タクテイカルブーツにカーゴパンツ、膝当て、やや季節外れなダボツと大きなフード付きのジャケット。それらは手袋も含めて真っ黒。顔には目の部分までもが黒いガスマスクもあるため、皮膚はせいぜい首もとが幾らか露出しているだけだ。

二人ともお揃いの衣装だったが、装備はそれぞれ違うようだ。互いにレッグホルスターを装備、腰にはベルトを巻いて、マガジンポーチやダンプローチ、グレネード類がぶら下がっているものの、それぞれのメインアームが違う。大野はモスバークM590に、松倉の方は大きな減音器を装着した45口径のUMP45だ。

松倉は銃に一点で保持する肩提げ紐を取り付け、大野と互いに装備を最終チェック。「それじゃ、あとは打ち合わせ通りに……始めよう」

車のスライドドアを開き、二人の男が夜の銀座へと飛び出していく。

銀座とはいえ深夜の裏路地は意外に狭く、薄暗い。終電を終えた時間帯ということもあって人通りも少なかった。そんな中に黒ずくめの男達が飛び出していくと、ふとすると彼らが闇に溶け込み、その姿を見失ってしまいそうだった。

ユリ、と相変わらず寝そべったまま煙草を吹かす武島が呼んだ。

「そう悲惨な顔するなって。山田さんは確かに優しいよ。普通なら保険を掛けた後は、暗合いを見て自分達の手で殺しておしまい。だけど、アンタはアタシらのところに送り込まれた。それって、チャンスってこと。アタシらと一緒に働いて、もし一人前になれるんなら……借金を返し、アンタは生き残れる。山田さんは多分、借金取り共からアンタを守って、その可能性をくれたんだ」

「そう……ですかね。何だか、もう……」

「ま、信じる信じないはアンタの自由。でも覚えておきな。銃を握る者はチャンスを得る。テールをひっくり返す可能性をね。経緯はどうあれアンタはそれを選択したんだ」

他人の希望を吸い取った上でのチャンスだけだね、と、武島はシートを戻すと、煙草を車載灰皿に押しつけながら無感情に付け足した。彼女はエンジンをかけ、ゆっくりと静かに発進させる。松倉と大野が走って行った方角だった。

「何を想うかは様々だけど、アンタの前に道はもう一つしかない。やるべきことをやればいいんだ、迷うことないさ」

ユリは胸元のシートベルトを両手で握って、武島の言葉を反芻させていると、とあるピルの裏の扉が開いているのが見えて来る。金属製の重そうなドアだ。

今回の計画はシンプルだった。ロナウダはあのワックが納まるデパートから数百メートル離れた、人気のない五階建ての古いビルの中に入って行ったのだという。

そこは商業ビルではなく、上階も地下も倉庫として扱われているようで、その地下一階部分をワックがかなり以前から借りているようだった。

わからないことがあまりにも多いから、とりあえずダメ元で突いてみよう、それで殺せ

るようなら御の字……というアバウト極まりないものだ。

松倉と大野がピッキングしてドアから突入し、再び表に出てくるまで武島の運転するハイエースは後部のスライドドアを開けたまま、その前をゆっくりと移動を繰り返し、彼らの脱出を待つのだった。

「武島さんは……どうしてこの業界に？」

「理由なんてないよ。そういうふうになされたんだ。戦争もあつたしね」

武島の年齢は二十歳前後だろう。ということは戦争時は恐らく今のユリと同じか、いかか若いぐらいだったはずだ。その時、彼女に何があつたのか。

「まっ、つってもさ。撃ち合いやつてる時の肌にビリビリ来る感じとか、頭ん中真っ白になつてるのにもつ以上にも思考がクリアになる感じとか、そういうのが好きなんだけどね。だから銃も派手なのが好き」

そんなのつて……。かすかに銃声が聞こえ、ユリの言葉を途切れさせた。

武島が新しい煙草に火を付けたが、わずかに緊張感を滲ませる。

地下で行われているとはいえ、開いている扉からかすかに漏れているようだ。それが車の開けっ放しになっているドアから入り込んでユリの耳に届かせているのだろう。

銃声が、続く。通常亜音速にしかならない45口径とサブレッサーの組み合わせのため、かなり音は鈍く、意識していなければ聞こえない。だが、それらとは関係なしに大野の

ショットガンと思しき派手な音が時折響く。

「荒い撃ち方してんなあ……らしくない。松倉のバカ、しくじつたな」

武島は自分の腰からハンドガンを引き抜くと、そのスライドを引く。グロックのようにも見えたが、違うようだ。S & Wがグロックの対抗馬として世に送り出し、様々な意味で大失敗したシグマのだと、その銀色のスライドを見てわかった。

車が丁度その開け放たれたドアの前まで来た時、そこから一人フードを被った黒すくめの男が飛び出してくる。UMP。松倉だ。彼はスリングに任せて銃を手放し、ベルトからぶら下げていたグレネードを取る。そうしていると大野がショットガンを撃ちまくりながら後退する格好でドアから出てきた。

弾が切れたのか、大野はショットガンを捨て素早くレッグホルスターからグロック17を引き抜き、これもまたビル内に向けて撃ちまくる。松倉がその大野の脇から二つのグレネードをそれぞれ投げる勢いを変え、奥に一つ、やや手前に一つを放り込み、金属ドアを蹴りつけて閉めた。大野がショットガンを拾い、車の後部座席に飛び乗ってくる。

「大野、どうした!？」

武島の問いかけに、わからない！ と大野はマスクを脱ぎ捨てながら、それこそわけのわからないことを言った。

松倉が車に乗ると同時に、武島はアクセルを踏む。車のエンジン音が高鳴り、速度が上

がる。ビル内から爆音が響いた。

「何か変だ、俺達が突入した段階ですでに戦闘の跡が……おい、嘘だろ！」

マスクを脱ぎ捨てた松倉は後部ウィンドウを見て、ユリが会ってから初めて慌てた声を上げた。

ユリもまた何が起こったのかと車のサイドミラーを見るのだが……そこには、冗談のような光景が映っていた。

——ロナウダ・ワックマインド。爆風で開いた扉から粉塵を纏うようにして、もっさりとした頭に黄色いジャケットを着たあの世界一有名なピエロが悠々と現れたのだ。

彼は優しげで、しかし同時に不気味な微笑みのままに、ユリ達を見てくる。

そいつはやれやれというように肩をすくめ、そして……走り出す。短距離走の選手を超えるような尋常ではない速度で、車を追ってくる。

松倉、開けっ放しになっていたスライドドアから身を乗り出すようにしてUMPを掃射。着弾するより先にロナウダがジャンプ。ユリの見えていたサイドミラーからその姿が消えた。

松倉の銃口が目標を追従しようとして上へ向いていく。それがほぼ真上に到達した時、車に衝撃が走った。——上に飛び乗られたのだ。

衝撃でハンドルがブレ、車はビルへこすりつけるようにぶつかった。だが、武島はアクセルを緩めない。運転席側のサイドミラーが弾け飛び、窓が砕け、フロントウィンドウに

ヒビが走る。凄まじい音を立て、車体を激しく震わせながらもなお進む。

ユリは、たまらず悲鳴を上げた。

大野！ 衝撃で車から落ちかかっていた松倉は上半身をほとんど外に投げ出すような体勢のままで叫んだ。

大野はそれに応えるように車内で大股を開いて寝転がり、体を安定させながら、モスバグに弾薬を一発だけ装填。即座に天井に向けてトリガーを絞る。8・38ミリの鉛玉による九粒弾。車内に脳が震える程の銃声が響き、天井に拳大の穴が穿たれた。

やったか。そう思う間もなかった。穴が穿たれた天井、そこに手が生える。いや、正確には手が、天井の穴から差し込まれてきたのだ。手袋を装着した不気味に黄色い腕……それはまるで毒を持つ深海の蛇をユリに連想させた。

位置は丁度仰向けの天井の真上。手が発砲した相手を探すかのように不気味に蠢く。

「なっ、なんだよ、コイツ!!」

大野が再び弾薬を装填しようとするも、そのショットガンを天井の腕が弾き飛ばしてしまふ。どれだけの力があつたのかわからないが、構えていただけの大野の体まで車内の壁に叩きつけられた。

腕が引っ込む。代わりに、ギャギャツと金属の裂ける音を響かせながら、小さな穴をこじ開けるようにして今度は天井からもっさりとした何か差し込まれて来る。

後部を振り返っていたユリは、それが奴の頭だと、あの不気味な微笑みで細められる両目が見えた瞬間にわかった。

濁った目、赤い鼻、そして分厚く鮮血を思わせる色の唇までが天井から現れ、ニチャリとユリの目を見て笑う。

絶叫。ユリは車を飛び降りようとしたが、シートベルトをしていて降りられない。急いで外そうとしたユリの顔を武島の銃のグリップがたたかき打つ。鼻血が噴き出した。

「そのまま！ 齒喰い縛れ!!」

武島が叫んだ直後、車体に再びの衝撃。奴が飛び乗った時の比ではない、それ。

武島は、路上駐車していた車に真っ正面からぶつかっていったのだ。

車体が一瞬つんのめるようにして、浮く。ユリの体がフロントウインドウに叩きつけられそうになるものの、胸と腹に喰い込むシートベルトがそれを防いだ。代わりに松倉と大野が、ユリと武島のシートの裏へ凄まじい音と共に叩きつけられ、二人が呻く。

浮いた車体が、その鼻先方向を約九〇度回転し、着地。サスペンションが撓る。それでも衝撃は殺しきれずに車内を襲い、ユリの尻を激しく叩いた。フロント以外の窓が全て碎け散る。宙に浮いていた松倉と大野が床に叩きつけられ、彼らはさらに呻いた。

ユリは何よりも先に天井から生えていたあの頭を探すが、そこには穴があるだけだ。いない。それを認識した直後、今し方ハイエースがぶつかった車の上に、黄色い人形の物体

が落下。天井を凹ませた。

ハイエースのエンジンはまだ、かかっている。武島がハンドルを大きく切りながら発進。あの黄色い人形の横……車の上に倒れているロナウダの脇を通り抜けていく。

その瞬間、ロナウダが動きだし、立ち上がろうとしているのが見えたが、それをはずきりと確認するより前にユリ達は裏通りを抜け、一通の道を逆走し、大きな道路——晴海通りへと脱出したのだった。

「よし、逃げ切ったぞ!」

武島がホルスターにハンドガンを戻す。その姿を見た後、ユリは先程殴られて出た鼻血をそのままに、後ろを振り返る。黒ずくめの男達が二人して倒れ、スライドドアは開いたまま、天井には大きな穴が開き、そして窓という窓はそのほとんどが割れていた。

今回の計画は単なる調査だったはずだ。見方によつては襲撃と言つてもいいだろう。だが、今のユリの胸にあるのは、襲撃された側の心情だった。

「つつうかさ、アイツ何!? 何したらあれだけやって無傷でいられんの!」

唯一傷を負っていない武島が言うが、それに応じる者は誰もいない。

だが、かすかに、ユリの耳には荒い息と共に、松倉の声が聞こえた気がした。

「……やってくる」

それは普段のそれと同じく、落ちて着いた、ともすると寝起きのようにも聞こえ



る、そんな声だった。

Title  
attack  
&  
consider

## ▽ 2章 『アタック&コンシダー』

あの失態の夜は過ぎ、ユリは詰め所のソファの上で朝を迎えた。

松倉達はあの後、同業者間で使い回していたという廃車同然のそれを業者に引き渡し、他のメンバー共々何も言わずに各々の家へと帰って行った。

ユリにとって意外だったのは広い倉庫のような一軒家は松倉達の家ではなく、単なる詰め所もしくは銃の保管とメンテを行う作業場としての意味しかないらしい。帰る場所のないユリは仕方なくその詰め所で寝泊まりすることとなった。

あまりに広い空間に一人だけ。屋内なのに、ソファで寝ていると野宿しているような気分になる。加えてロナウダの姿が瞼の裏に焼き付き、あまり眠れなかったが、窓から朝日が差し込む頃にはさすがにうとうととしていたらしい。ジリリリりと来客を告げるベルで彼女は跳ね起き、ソファから転げ落ちた。

ユリがシャッターを開けた途端、覗き込むようにして顔を出したのは、あの大きなサングラスに、球体に近い体型の山田だ。

「あ、やっぱ葛さんだけか。まあいいや、主に君に用があったんだ。あ、車に荷物あるか

ら、運んできて」

彼に言われるがまま、SUVから大きな段ボール箱を運び入れていると、ふと、その持ち心地や重さ、揺らした時に出る音からある物に思い至る。

「あ、これってひよっとして私の荷物ですか？ ワー、ありがとうございますッ！」

家が差し押さえられたので、着替えと生活必需品、そして勉強道具だけがユリの荷物の全てだ。それをしばらく山田の所に置かせてもらっていたのだが、わざわざまとめて持ってきてくれたようだ。

「学校行くんだろ？ 必要かと思つてさ……あー、葛さん、頭<sup>す</sup>っさいことになつてるし、シャワーでも浴びてきたら？ 荷物とかは残りこつちで片付けておくから」

ホントですか！ いいんですか!? と、ユリは寝起きを思わせない潑刺<sup>はつらつ</sup>とした声を出し、早速タオルと洗面道具を段ボール箱から探し出し、シャワー室へと走った。そして熱いシャワーを浴びている最中に、昨夜の武島<sup>たけしま</sup>達の言葉を思い出す。ロナウダのインパクトに負けすっかり忘れていた。

保険金について、山田に聞いたださなわけにはいかない。

早く行かないと帰られてしまうかも。ユリはシャワーもそこそこに、濡<sup>ぬ</sup>れた髪のまま山田の元へ行くとしたのだが、シャワー室から出るとおかしなことになっていた。

先程まで着ていた、血の染みが出来たシワクチャの制服と下着、靴下に至るまでがなく

なっていたのだ。代わりに、新品の制服と下着類一式。アルバートの訓練所にいた時も似たようなことはあったが、あれは訓練用の、サイズもあつていない着古されたツナギだった。だが、制服となると……これは……？

血が付いていたから代わりに用意してくれたと思えなくもないが、しかし、そんなに優しくしてくれるものだろうか？ 何より昨日の今日だ。あまりに早い。

ユリは訝<sup>まが</sup>しく思いながらもそれらを身につける。熱いシャワーの後におろしたての服は気持ちが良いかつた……が、それがまた問題である。サイズが完全に自分のそれだ。しかも下着類はサイズどころか自分が持っていたメーカーと同じそれ。不自然なまでに馴染<sup>なじ</sup>む。

や、山田さん！ と、髪を乾かしもせず慌てて彼の元へ行くと、そこには山田ともう一人の男がいた。カメラを掲げたそいつは、先程までユリが着ていた制服を綺麗<sup>きれい</sup>に畳み、バックに詰め込んでいる。

「ちよつ……それ、私のなんですけど！」

「うん、わかっているわかってる。あ、やっぱ葛さんアレだね、君、すっぴんの方が映えるよ。若さが出る。いいねえ」

「あ、ありがとうございます……って、そうじゃなくて！ 山田さん、コレ！ そしてソレ！ どういうことなんですか!?」

「うんとね、借金の利子の足しにするために、売っちゃうの！ アハハハハ！」

「ちよつ、それ……超困りますから！ 私、生活出来なくなっちゃいますから！」

「大丈夫大丈夫、同じ数だけ同じようなもの用意しておいたから」

「……え？ それじゃ、全然お金にならないっていうか、むしろお金がかかるんじゃない？」

「女子高生の使用済み衣類ってのは黄金のような価値があるの。ネットで捌くんだったら、ホラ、こちらの方がこれから君のそこら辺面倒見るから。あ、写真撮るから髪の毛とか、きちんとしてね。化粧は……あ、しない方がいいよね、うん」

たぶたぶと頬肉を揺らして山田はカメラの男に了解を得ると、ユリを再び洗面所へと押しやった。わけもわからないまま、ユリは髪を乾かし、セット。その後出てくると、ソファの前に照明等が立てられ、簡易的な撮影セットが出来上がっていた。

ソファに座らされ、いろいろな角度から写真を撮られまくる中、ユリは意を決して訊いてみた。あの、昨夜武島達が喋っていたことだ。

対面のソファに座る山田は悪びれた様子もなく、そうだよ、と笑った。

「おおむねアイツらが言っていることで間違いないよ。あえてさっさと君を処分しなかったのは、優しさじゃなくて、哀れみだけだ。アハハハハ！」

処分、という言葉に自分はすでに山田にとって人間扱いすらされていないのかと、ユリは悔しさと共に気持ちの悪さを覚えた。物だというのなら、この胸に湧いた悔しさは何だというのか。そこから始まる負の思考の連鎖に吐き気がした。

「やっぱねえ、十代のかわいい女の子が来ちゃうとさすがに罪悪感が出ちゃうんだよね。普通に処分しようとする、多分、君の場合散々犯されて臓器取られて、それから死体が

川に浮かんでるってことになっただろうから。だから、せめて真っ当に人間として死ぬるように、ね。ちよつとだけの可能性と共に……ね。かわいいから」

いいね、とカメラの男が言う。ユリが悔しげに膝の上で拳を握りしめ、唇を噛んで肩を震わせる姿を彼は褒めたのだ。嫌々やっている、というのが一部で受けがいののだという。正反対に樂しげに自主的にやっている娘じゃないとダメだという人もいるのだと彼は語るが、ユリにはもはやどうでも良かった。

「ああ、葛さん。こう言っちゃうと何だけど、死ぬんなら二年以内にね。保険の更新料がかかっちゃうから！ 何てね、アハハハ！」

山田は冗談のつもりなのだろうが、言葉はあまりにも残酷だった。ユリの目に、涙が湧いてくる。

家に多額の借金があると聞かされた時は現実感がなくて泣きもしなかった。大変だろうけどきつと何とかなる。いつものように前向きに、そう思っただけだ。

最後に泣いたのは家族が自分を置いて失踪した時だ。最初はそれも冗談か、少ししたらひょっこり帰ってくるだろうと樂觀的に考えていたぐらいである。ただ、その数日後、夜中に発作のようにベッドから跳ね起き、一人泣き叫んだ。

あの時はやるせないほどの哀<sup>かな</sup>しさしかなかった。だが、今は、違う。目に見えない何かに喉<sup>のど</sup>を絞められているような、息が詰まる閉塞感。すでに物扱いされていることへの悔しさ。山田やアルバートが凄<sup>すご</sup>くいい人だと思つて素直に尊敬し、笑つて付き合つてきたことへの後悔……それらがごちゃ混ぜになつて、液体としてユリの目に溜<sup>た</sup>まり始めていた。

早まるシャッターの音を聞きながら、ユリは俯<sup>うつむ</sup>き、世界から逃れるように喉を閉じる。

「世の中はね、どこもかしこも楽しそうに繕<sup>つくろ</sup>っているよ。絵本から飛び出てきたようなかわいらしいキャラクターが踊り、道化師が笑い、夢物語が繰り広げられる。まるで世界はバラ色だと思わせようとするかのように。でもそんなフィクションを現世に召喚するには、シビアなりアルを要求される。ファンタジーは痛い程の現実が支える張りばてだ。……あの、バーガーショップのピエロのようにね」

散々松倉と大野が銃撃を加えても倒れることのなかった化け物。……あれは何？

奴<sup>やつ</sup>への疑問と恐怖が、ユリの喉を開けさせた。

「アレね、俺が仕事回しておいてなんだけど、調べりや調べるほどヤバくつてさ。思わず笑っちゃつたよ、アハハハハ！ まともにやつて殺せんのかよつてさ！ そりゃあんな額を提示してくるわけだつて納得しちゃうもんね。倍出されたつて俺ならやらないもん」

山田の言葉を聞いていると、昨夜の武島の言葉が胸に蘇<sup>よみがえ</sup>る。アンタの前に道はもう一つしかない。未来への道は、一本だけ。そして、今、その道に立ち塞<sup>ふさ</sup>がつているのは借金や

山田や、己を見捨てた両親ではない。……ロナウダ・ワックマインド。もっさりヘアのマツド・ピエロ。今はただ、奴がいるだけ。

そう思ったとき、漠然としていた不安は薄れ、喉を絞めていた閉塞感がかすかに緩んだ気がした。いや、喉を絞めていた見えない物に具体性が増したが故に、手で触れられる……自らの力<sup>ちから</sup>でふりほどける、そんな気がした。

「……あの……今回の一件をうまくやれたら……」

「アレを殺せるなら、ね。……ま、主にやるのは松倉達だろうけど、それでもアイツとぶつかつて生き残れるようなら、きつと道は開けるさ」

やれば、一つしかない道が開ける。そう考えた時、ユリの鼓動が高鳴り、思わず手を胸に当てた。やれば、何とかなる。逆に言えば、やるしか手段はない。やらなければ終わり、やれば——やりきれれば……。

ユリにとつて何も状況は変わっていない。むしろあの殺すべき対象が常識のそれを超える存在であるらしい、ということがはっきりとわかったただけだ。むしろ悪くなっていると言つてもいい。だが、それでもはつきりと何かが変わったような気がした。

ユリは零<sup>こぼ</sup>れそうになっている涙を感じる。零れたら今の気持ちまで零れてしまう。だから、ユリはそれが筋を作る前に、声を上げた。

「やつて……やつて……やります、やつてみせます！」

ロナウダを如何にして倒すのか、まだ人を殺したこともない自分がどうやって。そんなことを無視し、ユリは言っていた。

道は一つしかない。たった一つだけ。他に選ぶ余地なんてない。だから、武島が言ったように迷う余地もないのだ。

道がないわけでもない。ただ障害があるだけ。ならば、それをどうにかするまで。そうするしかないのだ。よくよく考えてみれば当たり前のことじゃないか。

ユリはようやく普段の自分を取り戻せたような気がした。自分の良さは前向きさだ。あれこれ悩むより、一步でも進めれば景色は変わる。そこに希望も見えるものだ。ただ、ロナウダを如何にして打倒するのかを無視したように、場合によってはその一步を現実逃避とも言いが、それでも景色や気持ちが今のように変わるのなら無駄ではないはずだった。

一步は、一步なのだ。前向きさも現実逃避も、表裏一体というより、恐らくは同じもの。そして、自分の特技はそれなのだ。

「アハハハ、若いっていいなあ！ うん、まあ、頑張ってるね。あつ、じゃあ俺からアドバイスを一つ。松倉や大野君、武島にしっかり付いて行けば多分死に損なえる。松倉は否定するけど、アイツらは死ぬことが出来ない運命なんだよ。戦争でも、紛争でも、特にあの最後の夜、県境を強引に押し戻した激戦でさえ誰もアイツらを殺し切れはしなかった」

「戦争って、北海道の？ 紛争は栃木群馬間のですか……？」

「うん、そう。アイツら北海道じやちよつと有名な部隊に所属しているね。敗戦後に松倉と仲のいい連中だけで南下して紛争に参戦したんだ。普通死ぬつつう話なんだけど、見ての通り五体満足でピンピンしてやがるからね」

松倉達は、とサングラスの奥の意外に小さな瞳を細め、山田は続ける。

「強さとはかく、悪運の強さにかけては、あれ程の連中はなかなかない。君もその悪運を学べるのなら、きつと何とかなるはずだ」

ところで、とカメラの男が割り込んでくると、彼はシャッターを押すのを止め、ペンとメモ帳を取り出した。

「葛ユリさん、プロフィールはいただいているんですが、一つだけ念のための確認を」

ユリは目元を拭い、腹に力を入れて深呼吸。乱れていた気持ちを落ち着け、いつものように振る舞おうと決めた。何ですか？ と、軽く微笑んでカメラの男を見上げる。

「処女ですよね？」

「へえい？」

はい？ と言おうとしたが、おかしな言葉になってしまった。山田が笑う。

「何、ユリの処女がどうしたって？」

玄関から武島の声。見やれば、シャッターがギャギャと油の切れた音を立てながら開いていき、ニヤニヤした顔で彼女が現れた。



「え？ あ、あの……それって、その……答えなきゃいけませんか？」  
 「はい。やはり値段に影響しますので。いえね、臭いからして多分間違いないと思うんですが、念のための確認です」

「ちよっ……そ、それって!! そ、それに臭いって、そんなんで何が……!!」

「犬はガン腫瘍の有無を嗅ぎ分けるのももちろん、妊娠したか否かも鼻でわかるそうです。プロであるわたしが処女か否かを判別できないわけがないでしょう?」

凄まじい理論だったが、カメラの男の自信ありげかつ、当たり前のことを言っているだけだとする雰囲気はどこかユリに反論させる気を失わせる。

で、でもそれは……。と、恥ずかしさから言葉に詰まっていると、開けっ放しになっていたシャッターから車の音が聞こえ、頭に包帯を巻いた松倉と大野がやって来てしまう。

「答えなければ買い取り価格は下げざるを得ません。ですからお答えいただきたい。あくまで確認です、わたしは自分の嗅覚には自信があります。……葛さん、処女ですね?」

「……………はい」

ガタタツと、玄関横のロッカーを開けていた大野が狼狽える。音を立ててショットガン  
 を床に落としながらも、視線だけはユリを見ていた。

女友達の前でも抵抗のある内容を、昨日今日会った人の前で、さらには初めて会った人にまで告げるのはかなり辛く、恥ずかしさからユリはしばらく俯く他なかった。



撮影はもう終わりらしく、カメラの男、山田、そして松倉が何か話しているのを遠くに聞いていると、武島が隣に座ってユリの肩を抱いてくる。

そしてニヤニヤといやしげな目で煙草を吹かし始めた。

「そうかそうか。何かそれっぽいなと思ってたけど、やっぱかあ。気を付けなよ、大野に襲われるかもしれないから。童貞は処女が好物だからな」

こ、こら武島！ 大野が声を上げる。

レジ袋を提げながら、やたらに巨大なキャベツを小脇に抱えた松倉がぼそりと言う。

「……ユリにも護身の銃が必要になるな」

松倉さん！ 大野がまた非難の声を上げた。

その日の朝食はホットプレートで作った焼きそばだった。

## 1

奴は何なのか。松倉はホットプレートから焼きそばを取り分けながら山田に訊く。

山田もまた朝食を食べていくことになったので、ユリにはちゃぶ台が狭く感じられた。

「それはね、ぶっちゃけるとわからなかったの。アハハハハ！……おい冗談だって、肉なしはダメだって。何の情報もなしに顔出すわけないじゃん、ちゃんと肉入れてくれよ」

プシュッと、まだ朝の七時だというのに缶ビールを開ける武島が鼻で笑う。

「山田さん……アンタさ、手ぶらでメシ喰いに来たこと、前に何度かあったよ」

「酷いなあ、武島は。まあいいよ、事実だしね。アハハハ！ ま、ともかく、俺の方で調べてたのは依頼主の方。アイツら、何だと思っ？」

「ワック食べて腹壊した人とか？ もしくはそれで家族が……」

大野が各皿に盛られた焼きそばに刻み紅シヨウガを載せ、鰹節と青のりを振りかけながら言うと、つまんねえ、と武島が一蹴した。

「武島には優しさが足りないね、相変わらず。……依頼主は一人じゃない。というか、個人でもない。企業だ。それも、複数のデカイ企業が結託してる。……ワスバーガー、ドゥドゥバーガー、フレッシュアスバーガー、他数社だ」

「ワックのライバル店ばっかじゃないですか！」

ユリは大野から差し出された焼きそばに箸を差し込みながら言った。返答が来る前に早速食べる。武島にまた横取りされたらたまらない。

「どうかな、ライバル店と言えなくもないけど、売り上げの規模で言えばそのどれもがワックの足下にも及ばないよ。それより今回結託してる企業にはある共通点があるんだ」

「日本のバーガー企業……だな？」

「ビンゴ、松倉。その通り。……あ、どうも。いただきます」

各自に焼きそばが行き渡り、しばらくズゾゾと麵を啜り、武島に続いて松倉、大野がビールを開け、彼らの喉を鳴らす音だけが室内に響いた。山田は車で来ていたために、ノアルコールがあるなら……と言っていたが、水を口にしてのを見るに、ここにはないらしい。ユリがキッチンを覗いた時には、冷蔵庫が二台あり、一台はビール専用のようになっていて、大量の在庫があったのだが……その中に一本もないとは。

「だが、ワックと比べれば小さいかもしれないが、それなりにデカイ企業だ。自社が有する荒仕事用のチームぐらいいあるだろう。何で俺達のような外部を使う？　むしろ子飼いでいる連中の方が安く、確実に操れ……ああ、そうか」

松倉は垂れ流しになっていたちやぶ台横のテレビを見る。ユリもそれに倣えば、そこにはワック連続バイト殺害事件の報道があった。

「うん、お察しの通り、すでに動いたんだ。全国に支店を持つ彼らだから、一斉に各地で行ったようだね。対策を採られる前に、やったんだ。……銀座店以外はね」

「わからないことが増えたな。子飼いの部隊が動いた上で、なおかつ実質的に能力が不明瞭な俺達に仕事を回してきたのは何故だ？　そもそも何故奴らは結託した？　何故ロナウダを殺す必要がある？　そして、その銀座のロナウダつてのは……何だ？」

「うん、松倉の言うことはもっともだ。ただ俺の方から答えられるのは最初の二つだけかな。俺らんとこに仕事の話を持ってきたのは、恐らく銀座のロナウダに大半が返り討ち

あったからだと思う。調べてみるとあの店周辺で一ヶ月ぐらい前に恐らく二回は銃撃戦があったらしいんだけど、警察は動かさず、報道も何も無い。俺達がしているように、あらかじめあちらそちらを押さえているんだ。それなりに手慣れているよ。でも、それだけやってロナウダは平然としているってことを考えると……ね」

山田の言葉に大野があからさまに嫌そうな表情を浮かべる。

「大企業の子飼いでなると、装備もバックアップも相応ですよ。それで対処できなかつたって……」

「うん、悪い想像しか出来ないよね。もう一つの、複数の企業が結託してるとのは、こちらは俺の想像が大半だけど、多分シンプルだ。普通に彼らは企業として追い詰められてる。人気も売り上げも、ありとあらゆる面でワックに上を行かれていますからね。米国に本社を持つワックはその経験と広がりを超最大限に活用することで莫大な量の広告を打ち、顧客の意識にバーガーワックのイメージを植え付けることに成功している。……この辺りに関してはワックを追ったドキュメント映画があるから、それを見てくれ。んで、これに對抗するために、日本のバーガーショップは味や品質などを頑張っているわけだけど、そもそも手に取られなければ売れないし、ワックが圧倒的なパワーで先手を打ち、バーガーは安い物だというイメージを作り上げてしまった。これでは質の良いバーガーを提供しようとしても値段の時点で敬遠されてしまうわけだ」

「だから、負け組同士仲良くして勝ち組を潰そうってわけだ。わかりやすいな。出る杭は打っておきたい、か。とても日本的だ」

松倉は言つて缶ビールを飲み干す。そしてさらに冷蔵庫から六缶パックを持ってきた。「松倉さん、自分達の国だから、っていう気概もあるんじゃないですかね。他国の経済的侵略は看過できないって義憤があるのかも」

大野の言葉を、武島が鼻で笑う。

「義憤ねえ。あるかな、そんなのが、この国にさ」

「……け、経済に国境はないって、この間学校で先生が。いくら負け組でもバーガー企業は大きいですし、それぐらいわかつているんじゃないかと思えますけど」

ユリは勇気を出して会話に参加してみると、まあそういうものだな、と松倉たちが賛同してくれる。少し、嬉しかつた。

「ますますわからないな。そんな連中が何故ロナウダを？ 嫌がらせ以上の意味がない」

「松倉の意見はもともただけど、いくら唸ったところで答えはここじゃ出せないよ。……で、だ。俺の方から情報提供を求めるためにも、依頼主に連絡してみたんだけど、話を聞くには少し時間がかかりそうだ。多分どこまで情報を共有するかで向こうさんが会議でも開くんだと思う。遅くとも半月、それぐらいで考えていければ嬉しい。何とかする」「半月、か。微妙だな、何もせずに待つにはちよつと長い」

「やりましょう、松倉さん。敵がすぐそこにいるのに、尻尾巻いて逃げたまま半月も待つのは悔しいですよ」

大野の言葉に、ホットプレートに焦げ付いた麵を割り箸でこする松倉が、頷いた。「そうだな、奴のおかしな耐久力も気になる。俺の45口径は間違いなく奴の体を捉えていたし、グレネードはもちろん、ハイエースの天井を撃ち抜いた大野のダブルオーバックも着弾していないわけがない。だが、奴に傷らしい傷はなかった。……見極めるためにも、もう一度ぐらつぶつかつておくべきか」

自分の前に延びる道に立ち塞がる障害。ロナウダ。今一度、奴とぶつかる。

そう考えるだけで震えそうなくらいの恐怖と共に、やってやろうという気概が、ユリの胸に溢れた。

## 2

学は持てるだけ持っとけ。無知は必ず損を生み、不幸を呼ぶ。

松倉にそう言われ、ユリは彼らと生活を送るようになってからも当たり前のようにそれまでの高校へ通わせてもらっていた。

さすがに部活はお金がないので無理があったが、それは松倉の方から勧められてもやれ

はしなかつただろうと、ユリはさっさと諦めた。学校内でユリの両親が借金苦に失踪したことが噂になつていたので、仲良くしてくれる者は、もうほとんどいないのだ。

仕方ない、学校は人と仲良くするところじゃなくて将来のために勉強するところだと、ユリは早々に、そして前向きに割り切つていたので傷つくようなことはなかった。

それに遊んでいる暇もあまりないのだ。バカみたいに広い詰め所の掃除、皿洗い、食料等の買い出し、松倉達の車の洗車、何故か家からわざわざ詰め所に持ってこられている武島の衣服の洗濯とアイロン掛け……など、何だか微妙な雑用が日々待ち受けているのだ。

それに加えて毎日のトレーニンングも欠かさないようにしているので、部活動をしている時間的余裕はほぼないと云つても良かった。

あのビルへの強襲から数日が経つた頃には、ユリはもうその場での生活には慣れ、詰め所の隅っこにパーティションで区切つたプライベートな空間すら持つていた。

ただこれは見逃してもらつていてという方が正しいのだろう。何となく彼らの空気に慣れてきた頃に、それとなく粗大ゴミ置き場にあつたパーティションと段ボールを拾つて詰め所に持ち込み、勝手にスペースを作つたのだ。

何か言われるかと思つたが、大野はそれぐらいいいんじゃない？ と許可してくれたし、松倉はチラリと目を向けただけで何も言わなかつた。一度酔っぱらつた武島がパーティションにもたれかかつて破壊の限りを尽くした以外、特にこれといった干渉はなく、その

エリアをユリが実効支配することが出来ていたのでつた。

現在はパーティションと段ボールのサイズ関係で三畳程度だが、隙を見てそれとなく拡張してみようと、密かにユリは計画を立てていた。

「ユリ、アルバートから銃器の扱いはどこまで学んだ？」

ある日、学校から帰宅すると、松倉にいきなりそんなことを訊かれた。

いつもは一メートルぐらいいいか開くことのないシャッターが珍しく全部開かれていたのと、松倉と大野はともかく、武島に酒が入つてないのを見るにこれから何かあるようだ。

「携行火器に関しては一通り、ハンドガンからライトマシンガンぐらいまでの扱い方とメンテナンスは。RPGは実射はしませんでした。操作は出来ると思いますが。ただ、狙撃はちょっと。ミルドットの計算とか、高低差がある時に三角関数を暗算でやれてのは……。目は昔から凄くいいんですけどね。何かするんですか？」

「松倉の頭の傷も塞がったし、そろそろもう一度当たろうってさ」

武島がソファにふんぞり返り、紫煙を吐きながら言った。

彼女の言葉を信じるならば、要はあのロナウダといよいよ決戦だということだろう。ユリは慌てて構築したプライベートルームで私服に着替えた。

「ユリ、大野をあんま誘惑するなよ。襲われるから」

着替えた姿を一目見るなり、武島が笑う。ローライズのパンツにシャツ。薄手のパーカー



である。ウエスト周りが露出してはいるが、大の男が誘惑されるようなものではないだろうから、ユリは首を傾けた。

そんなことをしていると大野がゆっくりとジープを室内に入れ始める。

「え？　ちょ、何してるんですか!？」

「ユリ、武島、ちゃぶ台を片付けろ。下のカーペットもだ」

車を誘導する松倉に言われ、ユリは一人でそれらを片付ける。すると打ちっ放しのコンクリートだと思われていた床が、実は一部金属板で出来ているのだと初めて知れた。

松倉がその金属板にあった穴に鍵を差し込み、ガチャリと重々しい音を立てて何らかのロックを解除する。その後、鉄板に頑丈そうなフックを引っかけ、大野の運転するジープとワイヤーで連結。ジープがゆっくりと外へ向かって動くと共に、その厚さ数センチの金属板が引っ張られるようにしてズレていく。ゆっくりと現れていくのは地下への階段だ。

「うわっ、すご……」

「ついて来い、ユリ。お前に銃を渡す」

松倉と共に地下へ降りる。暗闇のそこに裸電球の明かりが灯った時、何故松倉たちがこんな倉庫のような場所を詰め所しているのか、ユリにはわかった気がした。

そこは、武器庫だ。地上階よりはずっと狭いが、それでも学校の教室ぐらいいはある。その荒々しいコンクリート打ちっ放しの壁に飾るように置かれている無数の銃器、床を転

がる弾薬箱、明らかに何らかの爆薬と思しき物が大量に放り込まれているケースなどが、当たり前のようになり、そして乱雑に置かれているのだ。

除湿器が稼働しているらしく、乾燥した空気の中にオイルの臭いが充満していて、慣れないと噎せ返りそうだった。

「うわ……何でもあるじゃないですか。あ、M240だ!」

「それには触るなよ、武島のお気に入りだ。ぶっ飛ばされるぞ」

「これがあるんなら、何で武島さん、RPKなんて使ってるんです?」

M240は世界中で使われる汎用機銃だ。全長は一二四五ミリ、重量も本体だけで二キロを超えるが、それでもこの手の機銃としては中量に位置し、ヘリや車の機銃はもちろん、個人携行火器としても扱われるその名の通り汎用性の高い銃だ。耐久性を始めとした信頼性も非常に高い。それと比べると、以前武島が使っていたRPKは重量が半分以下とはいえ、わざわざM240を差し置いて使用する理由がどれだけあるかとなると、あまりユリには思い当たらなかった。

「お前、アルバートのところで座学ばかり入念にやらされたらどう?」

「ええ、私、暗記物は結構得意なんですよ」

てへへ、と言いながらユリは少し照れる。だが、松倉はため息を一つ。

「座学だけじゃわからないよな。……M240はデカくて重いんだよ」

「わかってますよ、そんなの。でも、それを補って余りある性能だと思えますけど。あ、ひよっとして松倉さんのAKと弾薬を共有化するために……でも、大野さんはショットガンでしたよね?」

「お前も実際に扱ってみればわかると思うが、携行火器における一センチや一キロの差というのは数字から感じる以上にデカいんだよ。M240はゴリラみたいなマツチョでもなきや一人で運用できねえよ」

「……そういうものですか」

「それにRPKはきちんと国に申請して税金も払ってる銃だからな。表の仕事にM240は使えない」

「……あの、松倉さん……ひよっとして、ここにある銃って……」

「全<sup>すべ</sup>て違法品だ」

コレ全部!? 思わずユリは声を上げてしまった。何せ目の前には一個小隊に支給しても有り余るほどの火器があるのだ。これらを全てどこぞから密かに仕入れ、保管し続けているというのは信じられない。

ポカーンとして今一度地下室を見回していると、ユリはさらにおかしなことに気が付く。電気コードが不自然に壁を走り、一メートル置きに設置されている何らかの装置を経由しつつ室内を一周していた。その装置にはLEDが光っていて、通電しているのがわかる。

「あの、壁のコレって……何です?」

「違法品だって言っただろ。強引にここに来ようとする奴<sup>やつ</sup>がいたら、上の建物ごと全部ぶっ飛ばようになってる」

「……これ、全部ですか?」

「これ全部をぶっ飛ばすために、その壁の全部が爆薬だ。……安心しろ、専門の奴に設置させたもんだ。誤作動はまずしない」

とんでもない量の爆薬の上で毎日自分達は食事をしていたというのか。そして今自分はそれら爆薬に囲まれている……。ユリはその事実<sup>じつじ</sup>にゾクリとして、膝<sup>ひざ</sup>が震えそうだ。きちんと取り扱っていけば危ないものではない、近代の爆薬は基本そういうことになっているが、絶対というものは存在しないのだ。

ユリは出来るだけ考えないように、他に視線を移す。あんまり深く考えていると毎回ご飯を食べる時に怖くなる。毎日の楽しみであるご飯の味が落ちてしまうのはかなり痛い。

そうしているとまたおかしなものが目に入ってくる。さっきのM240は机の上に置かれているのかと思ったが、実際には大きな木箱の上に置かれていたようだ。その木箱は天板の一部が外されており、中がかすかに見える。

薄暗い地下室の中、箱の中はほとんど黒一色。だが、かすかに覗くその中にはプロテクターのようなものが放り込まれており、それらの中には**髑髏**のように見えるマスクが……。

「あれ? これ、どこかで……」  
 「おい、ユリ」

名を呼ばれ、慌てて松倉を見やると何かを投げつけられた。反射的に受け取る。重い。オイルとグリスのこびりつくような臭い<sup>にお</sup>が鼻をつく。

「これって……」

「お前の銃だ。今夜中にクリーニングして使えるようにしておけ。試射は明日やる」

「あれ、松倉さん、その銃使わせちゃっていいんですか?」

大野が上から地下を見下ろして、言った。

「俺が好きに使っても文句は言われないだろう。もう奴はここにはいないんだ」

ユリの手に抱かれているのは、あまり日本では馴染<sup>なじ</sup>みのない銃で、最初それが何なのかわからなかった。

明かりに当て、フレイム、アイアンサイト、そして左側に突き出ているコッキングレバーを見て、ようやくそれがFALである<sup>と</sup>知れた。しかしユリの頭に入っているそれよりかなりコンパクトだ。全長九〇センチに満たない。それにハンドガード、そしてアッパーレームにレールが付いている。ストックも折りたたみ式のスケルトンタイプだ。

「DSA社製、SA58 OSW。FALの銃身を切り詰めてレールアダプタ<sup>A</sup>システム<sup>S</sup>やら何やら付けて近代化したもんだ。弾薬は30口径。マガジンはその棚にあるのを使え」

FALはFN社が開発し、世界的に大ヒットした名銃だ。訓練中にユリも一度扱ったことがある。やや重いもののその分、堅牢<sup>かろう</sup>さを有し、単発<sup>たんぱつ</sup>で撃った際の反動も抑えやすく、優秀な銃だった。

いい銃だ。そう思う。だが、30口径ライフルの特性を考慮した上で手の中のSA58を見ていると、いくつか疑問がユリの頭に思い浮かんでしまう。

「あの、30口径の銃を小型化<sup>せいけい</sup>って、反動とか……? しかもコレ、地味にフルオートも付いているし……」

本来30口径、つまりこの場合の7・62ミリNATO弾の場合、M4などに使用される5・56ミリNATO弾と比べると弾頭は大きく、火薬量も多い。発射時のエネルギーもはるかに上回る。そのため7・62ミリ弾を使用する銃は基本的に5・56ミリのそれに比べると銃身は長く、銃自体も重いのが普通である。その長い銃身内で火薬をしつかり燃焼させることで重く大きな弾頭を十分に加速し、銃の重さで反動を受け止めるのだ。

それが小型化しているということは……。確かに今ユリの手の中にあるそれは、同程度のサイズであるM4などと比べると倍近い重さはあるが、7・62ミリ弾をフルオートで撃とうものなら制動出来るものではないはずだ。実際、以前イギリス軍が採用していたFAL、L1A1ではフルオートは不要だとしてセミオートオンリーの仕様になっている。

「マズルフラッシュはなかなかデカい上、フルオートはかなり暴れるぞ。撃つ時はセミ

にして、うまくコントロールしろ」

「そして、当然違法……と」

ご名答。松倉はさらりと言つてのけ、その他の銃や弾薬等を箱に詰め込み始める。

ユリは銃を眺めながら、何故そんな扱いにくい銃を自分に渡したのか、一人考える。錆を防ぐためにストックにまで多量にグリスが塗られたその銃。そこかしこに使用の跡

はあるが、使い古された感じではない。大事に誰かが使っていたのだという感じがある。

「あの、コレ、誰の銃なんですか？」

「俺達の昔の仲間にはFAL好きのバカがいたんだ。一緒に北海道で戦つて、そのあと、栃木まで行った。……今はもう、いない。だから、その銃も俺のものだ」

つまり、今は亡き戦友の銃。それがわかった途端、銃はさらに重く感じた。

ロシアの支援を受け、長きに亘つて展開した北海道での戦争、そして激戦とされたあの栃木と群馬の紛争を戦つた銃なのだろう。

松倉らと共に、かつての仲間がこれを抱えて硝煙弾雨の中を駆け抜けていたのだ。

「そんな大切な銃を……。いいんですか？」

「博物館じゃないんだ。寝かせておいても仕方ないだろ。遠慮無く使つてやれ」

ユリはハツとした。そんな戦友の銃を渡してくれるということは、ユリを仲間として認めてくれた、ということなのかもしれない。

かつての仲間が使つた扱い難い銃をあえて渡す……多弁ではない松倉は、銃を渡すことでその気持ちを表したのだと考えると、いろいろなところで合点がいく。

いきなり転がり込んできた借金まみれの自分。今まで雑用ぐらいしかしていなかったのに……実はそんなふうに使われていたのだと考えると、目頭が熱くなる。

SA58を持つ手に、思わず力が入った。

「あ、あのこの銃、大切にに使わせていただきます。あと、えっと、とにかくいろいろ頑張ります！ 戦闘以外でも、掃除とかの雑用もこれからはもっと、もっと頑張ります!!」

「壊していいとは言わないが、過度に大事にする必要はないぞ。雑用は、まあ、頑張れ」交換用らしい銃のパーツ類等を箱に放り込んでいた松倉が振り返り、ぼんやりとした眠たそうな目のまま、何やら不思議なものを見るような顔をした。

「いえ、そんな松倉さん達の大切な仲間形見なんですから、絶対大事にします！」

え？ と、武島の声が聞こえ、ユリは顔を上げる。

「あれ？ 松倉、あのバカ、死んだの？」

「知るか。ユリが勘違いしているだけだろ」

「……はい？ え？ ここにはもういないって……寝かせておいても仕方ないって……」

松倉が箱を持ち上げ、階段を上っていく。

「アイツは今北海道にいるってただけだぞ、ユリ。故郷に戻ったんだよ」

「……だって、愛銃がここにあるのに。あ、ご遺体が……」  
 「アホか、お前は。アイツの愛銃は中距離狙撃用にカスタムしたL1A1だ。FAL好きのバカだって言っただろ。その銃は、俺が奴に誤射されて殺されかけたから、その慰謝料と嫌がらせて奴のコレクションからパクったもんだ」

「……え〜……」

階段を上った松倉は大野に箱を渡す。武島が不思議そうな顔で煙草に火を付けた。

「松倉、何であんな銃使わせんの？」

「いつ死ぬかわからない初心者に俺らの銃を貸したくないだろ。腐りかけのAK使わせるのもどうかと思うしな。……おいユリ、何してる。扉閉めるからさっさと上がってこい」  
 え〜い、とユリはやる気のない声で応じるのだった。

### 3

日曜日の夜。あの初めてのロナウダとの接触から丁度一週間。

何故かまたハイエースだった。それも前回廃車にしたのと同じように、後部座席が取り払われたタイプだ。今回はユリも松倉と共に後ろである。

大野は見張りで昼頃から姿を消していた。

「あの、覆面とかっていらぬんですか？」

ユリの服装は前回の松倉達のような夜の闇に紛れるのではなく、私服をベースにしたものだ。ジーンズにシャツに、手袋、膝当て、肘当て、そしてボディの前後を守るだけのシンプルなおアーマーキャリングベスト。これにマガジンポーチを付け、腰に巻いたベルトにはダンプポーチを提げた。サイドアームはないが何故か鍔付き帽を大野から貰っていた。「俺達は現行犯でない限り警察に捕まったり、マスコミに報道されたりはしない。そのため根回しも終わっている。安心しろ。どうせするならお前のクラスメイトに出くわさないことを心配している。知り合いはいろいろと面倒だから」

松倉はタクティカルベストにAKのマガジンを差し込み、腰回りにいくつかの手榴弾ポーチを提げていた。キンパーのガバメント等も用意していたが、全体的には軽量な印象である。——一戦する。それ以上も以下の用意もない。

しかしながらポニーテールに髪をまとめる武島はそれとは趣が違ふ。軽装ではあるのだが、ショルダーホルスターを身に着けてハンドガンを差し、腰回りにいくつもの大きなポーチを提げていた。そのポーチの形からするに、恐らくそのほとんどがRPKの75連のドラムマガジンなのだろうが、いささか過剰な弾薬量のようにユリには思えた。

武島が煙草を吸い始めたので、車内には紫煙が満ちる。松倉が嫌そうな顔をして窓を開けると、夜の闇の中を大野が音も立てずにやって来た。



「やっぱり動く様子はないですね。ただ、今回はもしかしたらロナウドだけじゃないかもしれせん」

とうとう？ 松倉は車内に積んでいたポーチが付けられているバンダリアとベルトを大野に投げ渡して訊いた。

「ロナウドがビルに戻った後で、店員<sup>クルー</sup>が出たり入ったりしています。荷物も何か運び込んでいたんで、もしかしたら……」

待ち伏せ。その可能性は十分にあるだろう。先日の山田の話信じるのなら、松倉達の前ですでに一度か二度は襲撃が行われているのだ。むしろ前回の罠<sup>わな</sup>もなかった方が驚きというものだろう。

「そうか、まあいいさ。……それじゃ今回の予定を話そう」

いよいよ実戦だ。そう思うとユリはスリングにぶら下がっていた愛銃のグリップを握る。ギューユツと手袋<sup>グローブ</sup>が鳴った。

松倉がタブレットPCを取り出すと周囲の地図を表示させ、そこに現在位置を示す青い点と、ロナウドがいるであろうあのビルの位置の赤い点が現れる。彼の指先がそのビル、及び前回一波乱あった裏通りを見下ろせるビルを指さした。

「ユリはこのビルの屋上へ行け。エレベーターは使わず、監視カメラに姿が残る。脇<sup>わき</sup>の非常階段が使えるはずだ」

「……あの松倉さん。私、狙撃苦手って、以前言いませんでしたっけ……?」

先週見た限りでは、はっきりとは覚えていないが、松倉が指定したのはそう低いビルではなかったはずだ。それも地図上におけるそのビルとロナウドとのビルは直線距離では二〇メートル程度。仰射角はそれなりにあるだろうから、やや身を乗り出すようにして撃つ必要があるはずだ。銀座という都市部であるからビル風の影響もあるだろうし、撃ち下ろしは水平の狙撃に比べて重力の影響が若干変化する。

今ユリの経験と技術力では対応できるものではなかった。

「誰もお前にそんなものは期待していない。何よりその銃で何が出来る。飾りだ、邪魔なのが現れたらそれで替せ。俺達の誰かが撃てと言うまで撃つんじゃないぞ」

松倉の物言いにユリは若干イラッとした。まだ与えられてから数日しか経過していないが、自分の手で完全分解を行い、クリーニングし、オイルを塗布した。そして大野から貸してもらった光像式照準器<sup>ダクトサイト</sup>を取り付け、射撃場で調整も行ったのだ。もうすでに愛着があった。それをバカにされればそう感じるのは当たり前である。

「その装備を渡したのは山田さんからちゃんと銃を持たせてやってくられて頼まれたからだ。本来ならハンドガンすらお前には必要ない。……いいか、ユリ、お前がするのは撮影だ。カメラと三脚がそのバッグの中に入っている。ある程度ズームして、ロナウドを撮影しろ。今夜倒せればいいが、できなかった時に役に立つ。無線機も入ってるから後で耳

に着ける。……ほら、どうした。行け。二時になったら始める。時間はないぞ」  
 うう……。呻くユリは口惜しい気持ちで松倉を見やり、握っていた銃をそれとなく揺らす。自分も戦いたいとする彼女なりの精一杯のアピールだった。

だが、松倉が命を撤回することはなかった。ユリはS A 58のスケルトンストックを折りたたみ、それを鞆に入れて車外に出る。

辺りを気にしながら、仕方なく言われた通りにビルへ走った。

ユリは相変わらず自分が雑用ばかりしていることに不満を感じる。

元々人を殺したかったわけでもないし、ロナウダのような化け物と戦うことに憧れたわけではなかったが、それでも今のような状況は不満なのだ。

きちんと仕事をして、きちんとそれに見合った評価・報酬をもらいたかった。

指定されたのはまともそうではない怪しげな雑居ビル。一二階建てらしいが、その半分ぐらいは店を経営しているのかどうかもわからないような、オンボロな雰囲気である。

「……高いなあ。これを階段かあ」

手にしていたバッグには手で持つところしかなく、肩からはかけられない。そのためカメラと三脚、そして銃が入ったそれがやけに重かった。

やれやれ、そう思いながらユリは非常階段を封じていた格子扉に手をかけるのだが……開かない。錆びついているのかと思い、ノブに力を込めたがダメだ。鍵がかかっているら

しい。銃で破壊してしまおうかともユリは一瞬考えるが、サブレッサー付きのハンドガンではないのだ。発射はもちろん、着弾時にも激しい音がすることだろう。

松倉達ならピッキングとかが出来るのだろうが、ユリにはその技術も道具もない。一度戻ろうかとも思ったがそうしていると、二時までには時間が足りなくなりそうだ。

仕方なく精密機械の入った鞆を気遣いながら、ノブに足をかけて扉をよじ登り、上に空いていた隙間から階段へ。屋上に向かう。

薄汚れ、エアコンの室外機が音を立てる屋上に辿り着くと、急いでカメラを設置。操作方法はわかったが、夜間撮影用のモードを探すのに少し手間取った。

鞆の中に無線機とイヤホンが入っていたので、腰から本体を掲げ、イヤホンを装着。「こちらユリです。カメラ、セツト終わりましたけど」

『松倉だ。よし、それじゃ時間通りに始めるぞ。大野達も位置についている』

そういえばユリは行けと言われたから屋上に来ただけで、今回の作戦というものを一切聞いていなかった。聞かせる意味もないとされたのか、単にカメラで撮影するだけで必要ないからと判断されたのか。

ユリは腕時計で時刻を確認し、撮影を開始する。コンパクトなそれだが、性能は悪くない。夜間、二〇〇メートルを超える距離でもしっかりと細部まで見て取れた。

カメラの液晶モニターを見てみると、どこからともなく大野と松倉がビルの壁に張り付

くようにして現れた。武島の姿はない。ショットガンのシェルポーチが付いたバンダリアに、ポーチがいくつか下がったベルト。それにレッグホルスターだけのせいとか、やや軽装に見える大野は、今回の得物もショットガンだ。

ロナウダがいるビルに二人が接近し、裏口の扉へ手をかけようとした……その時だった。扉が内側から開き、中からワックの店員が現れる。

あの爽やかなデザインの制服を着た男。それがユリに判別出来た次の瞬間には、彼はショットガンのストックでたたかに側頭部を打たれ、吹っ飛ばされた。

一切の躊躇無く大野が飛びかかるようにして襲い掛かったのだ。彼は倒れ行く店員の上へ飛び乗る。それと同時に、まるで全て予定されていた動きであったかのように、松倉が開けられた扉からビル内へ銃口を向け、様子を窺う。

『松倉さん、コイツ、銃を持ってますよ。M A C ー10だ』

回線が開かれたままらしく、大野の声がユリの耳にも届いた。M A C ー10は大型のハンドガン程度のサイズしかない小型の短機関銃だ。

『また微妙なものを持っているな。金がないわけじゃ……』

松倉のどうでもよさそうな声が聞こえたが、それは途中で銃声が打ち消した。

松倉のAKが吠える。そして即座に横へ飛んだ。するとAKとは違う猛烈な銃声が聞こえ、対面のビルの壁が一瞬にして削り取られる。

『M A C で武装した店員だ、大野、グレネードを放り込んでやれ』

大野、即座にポーチの中から取り出したグレネードを一つ、ピンを抜いて放り込む。そして開け放たれていた扉を閉めようとするのだが、その扉ごと大野が吹っ飛ばされた。

爆発ではない、中から二つの人影が飛び出してきたのだ。

それらが路地裏を転がる。それと同時にグレネードが炸裂。ビル内から爆風と共に粉塵が噴き出て路上の二つの人影を包んだ。

『……何だ、コイツら』

大野の呻くような声に應じるように、彼と松倉の間で、粉塵を浴びた二つの影がゆっくりと立ち上がる。

制服を着た男女の店員。だが、何かがおかしい。その顔には笑顔が張り付いているのもちろんのこと、両手にM A C ー10、腰にはまるで短いスカートのように細長いマガジンポーチが大量に提げられていた。

大野、仰向けに倒れたまま、顔だけ上げると共に股の間から銃口を出すようにしてショットガンを構え、男店員に向かって撃つ。

男店員がジャンプ。一瞬にして数メートルもの高さに昇る。

バカな、という誰かの声がユリの耳に届いた。

男店員は空中で両手に握っていたM A C ー10を大野へ。発射。凄まじい高速連射。拳

銃<sup>じゅう</sup>弾の豪雨が山野を襲うも、かろうじて彼はこれを転がってかわした。

男店員は射撃の反動で、その体が空中で回転する。射撃を止めると膝<sup>ひざ</sup>を抱え、まるでフィクションの忍者のように軽やかに身を躍らせた。

一方、松倉は女店員に銃口を向けるも、トリガーを引けないでいた。女店員が地上を信じられないような速度でジグザグに走り、接近。そしてジャンプして一度ビル壁を蹴ると空中から松倉に襲い掛かった。

両手に握られた二挺<sup>ちゅうとう</sup>のM A C - 10の銃口が松倉を狙う。距離、七メートル。高速連射故に激しいブレが生じるM A C - 10の性能からすると間合いは理想的だった。

路地を照らすマズルフラッシュと共に放たれる弾雨。だが松倉はその弾雨の下を飛び込むようにしてぐり抜ける。銃口は反動で必ず上方へ逃げる。下を抜けるのならば初弾をかわせれば、ある程度凌<sup>しの</sup>げるのだ。

地面を転がった松倉の手はA Kのグリップを離れていた。即座に反撃出来ないかと判断した彼は腰のホルスターからハンドガンを抜く。ガバメント。

上空を飛び抜けた女店員が着地するタイミングで、松倉は膝立ちのまま発砲。二発。一発は腰へ。二発目は振り向こうとした女店員の左手首を粉碎した。

だが、それでもなお女店員の笑顔は崩れず、倒れながらも右手のM A C - 10を向けてくる。発射は、ない。弾<sup>たまご</sup>切れかとも思われたが、そうではない。松倉の背後には倒れたまま

二射撃目を放たんとしている大野と、空中から今まさに着地しようとしている男店員の姿があったのだ。

意識的なのか、それとも偶然なのかはユリにはわからなかったが、松倉は結果的に挟み撃ちになる状況を作っていたのだ。

剣のそれと違い、挟み撃ちは銃撃戦においてはまず使えるものではない。必ず同士討ちになってしまう。それも弾着が拡散しやすいM A C - 10ともなれば狙撃も難しい。

女店員、銃口を向けたまま笑い続ける。そこに松倉はためらいなくガバメントを撃ちまくる。女店員が倒れるまでに、マガジンの中にあつた45口径、計九発を叩き込んだ。

ホールドオープンしたハンドガンは松倉はホルスターに戻さず、腰から提<sup>た</sup>げていたダンプーチに放り込むとスリングで胸から下がっていたA Kを持ち、即座に大野の援護<sup>えんご</sup>へ意識を向けた。

だが、その時俯瞰<sup>ふかん</sup>から全体を見ていたユリの目は、九発もの45口径が撃ち込まれたはずの女店員が蠢<sup>もが</sup>くのを捉えていた。9ミリルガー弾を上回る打撃力<sup>うちげきりき</sup>を有する45口径を……本来なら一発で十分なダメージを与えられるはずのそれが九発。それを受けてもお、絶命していないというのか。ユリは全身から冷や汗とも脂汗とも言えないものが噴き出した。仰向けに倒れていた女店員が、うつ伏せに寝返る。そして、ボロ雑巾<sup>ぞろぞろきん</sup>のような手平をぶら下げる左腕を地面に突く。立ち上がるというのだ。

ユリは無意識に鞆に放り込んであったSA58を取り出し、折りたたんでいたストックを広げる。ガチンと締まりの良い感触がしてストックをロック。

30口径の弾薬が二〇発入ったマガジンをマガジンポーチから引き抜き、ライフルへ。左側に伸びるコッキングレバーを引いて、放す。薬室に弾薬を装填。

屋上を囲む柵の隙間から銃口を出す。左手は大野から借りたフォアグリップを、右手はセレクトターをセイフティからセミハ切り替え、グリップをギュッと握る。脇を締める。構えた。右膝を突き、立てた左膝に左腕を寄せ、全身を小さく固めるようにして眼下を狙う。ダットサイトの中に女店員とそちらに背を向けている松倉の姿がすっぽりと収まる。

この時になってダットサイトの電源を入れ忘れたことに気が付いたが、今更それをどうこうする余裕はなかった。感覚である程度は狙えるはずだ。

「松倉さん、後ろ！」

言うなり、ユリはトリガーを引く。SA58が雄叫びを上げた。暗かった屋上が銃口から盛大に噴き出すマズルフラッシュで照らされ、暗闇に慣れたユリの目を眩ませる。

「クズ!! 何しやがる、殺す気か!」

松倉のらしくない慌てた声がして、ユリは目を細ませながらも何とか眼下を見やると……松倉が地面を這い蹲って顔をこちらに向けていた。

どうやら放った弾薬は松倉の近くに飛来したようだ。

「う、うああ……ごっごめんさい!!」

「呻きたいのはこっちだ、何をして……!!」

喚く松倉の上にあの女店員が飛びかかった。先程の攻撃ですでに全身スタスタになり、制服が黒色に近い程に血に染まっている。普通ならば絶対に死んでいるであろう状態でありながら、そいつは平然と松倉に喰らいつこうとしていた。すでに両手がないのだ。

「何のための無線だ、それを考えろ! せめて一発撃つ前に一言言え!」

馬乗りになる女店員の首をAKのストックで押しやりながら、松倉はなおもユリへの非難を続ける。

何だかその非現実的なまでにズレた有様が、逆にユリに冷静さを取り戻させた。

すみません! と一言口にしつつ、ユリはダットサイトを点灯させる。輝度が高すぎて、目が自然とその明るさに合わせてしまつて松倉達の姿がユリの視界から消えてしまう。調整しようとするものの、よくよく考えると自分の腕ではどのみち松倉に当たる可能性があるため、撃つわけにはいかないことに思い至つた。

「ええい、仕方ない。今行きます!」

ユリはカメラをそのままにして、銃を握りしめ、スリングを体に通すと非常階段に向かった。おい、来るな、そう言う松倉の声すら聞こえない程に呼吸を乱しながらも、階段を一気に下る。一階、ロックされたままの鉄格子扉が見える。

錠を外す数秒が今は惜しい。ユリはそう判断すると銃を構えて扉のノブに向けて二発を放つ。マズルフラッシュ。そして着弾の火花が散る。

うらあ！と、声を上げてユリが扉に向けて蹴りを放ち、そして跳ね返されて尻餅をつき、うああ……と、また呻いた。

まったく鍵は壊れていない。映画のようにクールにはいかないようだ。

ユリは何とも言えない情けなさを感じながらも、グリップから手を放し、大人しく指先で普通に錠を開けて、格子扉を抜けたのだった。

気を取り直し、ユリは再び走る。松倉達が戦っていた辺りまで来ると、到着するまでの二、三分の間に何があったのか、裏路地は血で染まりきっていた。松倉が撃ち抜いた女店員の手首と、MAC-10、そして大量の薬莢がそこに浸かっている。

血と臓物の臭いに、ユリの鼓動は先程とは違った意味で高鳴り始める。吐き気がした。

ああ、そういえば銃で戦うってそういうことなんだ。頭のどこかでそんなふうに冷静に思う自分もいるものの、ユリは震えそうになる己の手足を感じていた。銃のグリップを握り締めて構え、体をビルの壁に押しつけるようにして震えを抑える。

教えられた通り、銃口と共に視線を動かし、辺りを警戒する。だが、ダットサイトがそのままだ。フーツフーツとユリ自身獣のようだと思ふ息を吐きながら、その輝度を落とし、夜間戦に適当なレベルに調整。

ピチャリ、と水気のある音が聞こえ、慌ててそちらに体と銃口を向ける。反射的にトリガーに指がかかってしまうのをギリギリで堪え、その人差し指を真っ直ぐに伸ばしつつ、対象を目視しようと暗闇の向こうを窺った。

丁度ユリがいる場所は裏路地の、ビルの背と側面で作られたT字路、その交差点。四方八方から狙われることがないとはいえ、銃口を向けていない二方向が怖かった。

ピチャリ、ピチャリ、と音が続く。誰かが歩いてくる。人影。だが、その動きは……まるで足に怪我を負ったような……。

そう判断した時、それは飛んだ。飛沫を上げながら上空、数メートルへ。側面の壁を蹴り、飛来する鷹のごとくユリを上空から狙ってくる。

ユリ、右膝を血に濡れた地面へ即座に付け、狙い、そして四発、連続してトリガーを引く。初弾こそ対象をかすめたが、残りはどこに飛んでいったかもわからない。だが、そのマズルフラッシュにより接近するそれが何であるのかを照らし出された。

女店員。すでに片足首と左手首がなく、右手も肘から下がぶら下がっているだけ。制服は破け、腸を垂れさせ、口角が裂けて口が異様に大きく見えた。

開かれた口の中に見える見慣れた人間の歯が、獣の牙よりも生々しく、恐ろしい。何より彼女はそんな有様でありながら、未だ目は笑っているのだ。開かれた口と合わせて漫画のキャラクターが大笑いしているように見えなくもない。それが現実存在し、腸を垂ら



しながら襲い掛かっているとこんなにもおぞましいものなのか。

ユリは驚愕し、滅茶苦茶にトリガーを引く。だが、当たったのは一発だけ。店員の胸元に着弾、貫通。血しぶきを上げるも、それだけだ。空中から来る彼女を止められない。「うがあらッ！」

ユリは頭の中が真っ白になる。膝を上げると同時に、目前に迫った化け物の頸に銃口を叩きつけ、そいつの体を吹っ飛ばした。ユリもそのまま銃に、そしてそこから繋がるスリングに自分自身引っ張られ、血に濡れた地面を転がる。

全身が血にまみれたが、もはや気にしている場合ではない。

ユリは慌てて立ち上がるとめめる銃を必死に構え、今し方吹っ飛ばした女店員を捜す。いた。血の中で仰向けになりながら、死にかけた虫のようにピチピチと蠢いていた。

何かが変だ。そう思った直後、女店員が仰向けではなく、うつ伏せに倒れているのだと気が付いた。首が、一八〇度回転して顔が見えていたので、仰向けに見えていただけだ。

息が乱れた。涙が出た。何の涙なのか、ユリ自身もわからない。ただ、言いようのない哀れさを覚え、ユリは銃を構え直し、女店員の頭に狙いを付けた。

早く殺してあげなきゃ、そう思った。本当に何の悪意もなく、ただ、ユリはそう思った。そして、そう思ったこと自体に、己の体が硬直する。

自分は、何様だ。人の生き死にをそんなに簡単に……。しかし、そんな疑問と共に湧き

出るもう一つの疑問。

——果たして目の前のコレは、人間か？

人の形をしていた。だから人間か。犬なら、猫なら、普段食べている豚や牛や鶏なら、自分の判断で殺してしまってもいいのか。苦しんでいるから楽にしてやるために、殺してやるべきなのか。どうして殺したら楽になると思うのか。殺せば少なくとも自分の目の前で苦しんでいる姿を見なくなるからってだけじゃないのか。本当は苦しくとも一秒でも生きたいと思っているのかもしれないのに。たとえ自分を襲ってきた人らしきものであったとしても……。

ユリの頭の中でわけのわからない考えが次々に浮かんでは消え、そしてまた新しい考えが浮かんでいき……そして、それら全てが頭から溢れるようにして、ユリはその場で膝を突き、嘔吐した。腹の中にあつたものを全て吐き出すほどの勢いのそれだったが、S A 58だけは頑なに胸に抱いたままだった。

全てを吐き出した後も、まだ何かを絞り出すかのようにユリは背を丸め、膝を突き、左手を地面に付け、嘔咽を漏らし続けた。

だが、それは唐突に止まる。ユリの背筋にまるで冷水を垂らされたかのような寒気が走る。彼女の前、頭のすぐ近くに何かが立っている。その気配を、感じたのだ。

ユリは、震えることすら出来ずにゆっくりと顔を上げた。おかしな形に折れ曲がった生

足。雲を垂らすスカート。垂れ下がる腸。微笑みながらこちらを見下ろしている、女店員。その笑顔が、ユリの目に飛び込んでくる。

先程までおかしな方向を向いていた首は、今はきちんと真っ直ぐに前を向いていた。

「お待ちのお客様は、こちらへどうぞ」

後ろから声。ユリはそちらに首を向ける。男店員。小綺麗な制服や、腰回りに提げた大量のポーチがない——あの最初に大野がストックで吹っ飛ばした男店員だ。

その手にはM A C 10があり、そして優しいな笑みでユリに銃口を向けていた。

男店員の指がトリガーにかかる。それをユリはただ、涙で歪んだ視界で見ていることしか出来なかった。

死ぬ。そう思ったものの、実感として感じられない。体も動かない。

ただ……男店員の後方に、何やら赤い点が見える。それが、気になった。

「頭上げんなよ」

声と共に、男店員の頭が弾け飛んだ。それが見えた直後、M A C 10のそれとはわけの違う強烈な銃声の連射音。フルオート。彼の後方に見えた赤い点の場所には、R P Kを構え、煙草を啜らせた武島の姿。

射撃音が止まらない。武島がフルオートで弾をばらまきながら平然と歩いて来る。己の口と銃口に火を灯し、煙を漂わせながら。

男店員の体が倒れる事も出来ずに震え続け、そして女店員もまたユリの目前で生き物から生き物だった物へ変えられていく。

ユリの頭上を数十発の弾丸が飛翔し、血が舞う。

尻餅をついたまま、呆気に取られていたユリの横で二人分の肉片が地面を転がった。

R P Kの銃口は元より、その猛烈な連射によりすでに銃身からもうすすらと煙が上がり始めていた。

武島は煙草を指で取り、灰を落とす。

「危なかったねえ、ユリ。血とゲロにまみれて死ぬとこだったじゃないの」

ユリは目元をこする。薄暗闇の中とはいえ、己の手が完全に血に染まっているのに気が付いたが、もうどうでも良かった。

「あの、この店員……さっき、首が反対に……。でも、どうして……」

「見た。急に首がグルッと回って、普通に起き上がった。……おっと」

武島が素早くホルスターからハンドガンを引き抜き、ほぼ肉片と化している女店員へ一発放つ。頭だった。動いたのかもしれない。

「松倉さん達は……?」

「さっき店員一人を引き連れてあのロナウダのビルに突入してた」

ユリは這い蹲るようにして、力の入らない足腰を叱咤しながら立ち上がる。下着まで湿っ

ていたが、もしかしたら自分でも気が付かない内に失禁していたのかもしれない。

ドドンと、音ではなく振動のようなものをユリはかすかに感じた。

ジジッと、耳に着けっぱなしになっていたイヤホンがノイズを拾う。その中にかすかに松倉と大野の声が聞こえる。先程から通信がなかったのはビルの地下に彼らが潜っていたせいだったのかもしれない。

「武島、俺と大野、出ろ。準備しろ、その次だ」

射撃音も聞こえてきた。武島が煙草を捨て、ロナウダのビル、その裏口の扉へ銃口を開けて構えた。今の通信でユリもこの後の展開を察し、その臓物まみれの場所から少し離れた場所に移動。武島と肩を並べるようにして構える。だが、マガジンの中に何発残っているのか、ユリにはわからなかったため、念のために新しいマガジンにチェンジ。

抜いたマガジンにはまだ何発が残っていたようだ。捨てずに腰のダンプポーチへ入れる。弾もマガジンも、安くないのだ。

そうこうしていると、その扉から松倉、そして一拍置いてから大野が飛び出してきた。

「これは、ダメかもしれないぞ」

松倉はそんなことを言いながら走り、AKのマガジンを交換。地面にスライディングするようにして膝を突き、今し方出てきた扉へ向けて構える。

大野は女店員の内臓を踏んづけたのか、血と臓物とユリの嘔吐物のある場所で転倒し、

悪態をついた。先程までユリもそこにいたとはいえ、あまりに悲惨な大野の姿にユリはまた吐き気がした。

そして、そんな有様の中に、それは聞こえて来る。

——ルック♪ ルック♪ ミー♪

不気味な歌と共に現れるもっさりとしたヘア。薄暗い夜の路地裏でありながらも目が覚めるような黄色いジャケット。……奴だ。

ロナウダは、当たり前のようにそのビルの裏口から現れる。その手には何かなせ故かワツクのお持ち帰り用紙袋が提げられていた。

「いい加減にして欲しいな。ワツクがいくらサーブिसが良くても、さすがにこう何度も何度も……おや？ 何だ、やっぱりやられちゃったのか。折角、警備用カスタムモデ——」

何の合図もなしに、銃撃が始まった。扇状せんじょうにロナウダを囲んだ松倉、武島、大野による、斉射。先程同様のRPKのフルオート、松倉のAKもまたそれに加わり、ショットガンの大野の音がアクセントのように響く。

ミンチを作ろうとするかのようなその有様にユリは自分が撃つのを忘れた。しかし、撃たなければと思った後も、トリガーを引くことが出来ない。

驚愕し、指が固まっていたのだ。

一斉射撃と同時にロナウダは右手に提げていたワツクのお持ち帰り用の大型紙袋を武島

達に向けて差し出した。それだけである。それだけで、避けようとすらしなかったのだ。ロナウダを外れた弾はビルの壁を削り、鉄製の扉すら今や破壊され、地面を転がっているというのに、武島の75連マガが空になってもなお、ロナウダは、無傷だった。

袋を下ろし、あの不気味に赤い唇を歪ませ、ロナウダは微笑む。

「どうだい、凄いだらう。ワックはエコロジーにも気を遣っててね。この紙袋は無漂白で自然に優しく、それでいてこのように弾よけに使えるぐらいに丈夫なんだ。これによって生産時に排出されてしまう二酸化炭素を大幅に減らしているんだ。ただ、水には弱いからね。雨の日にはビニール製のレジ袋が——」

松倉が撃った。一発。てっきりマガジンが空になるまで撃ち切ったのかと思ったが、まだ弾を残していたらしい。

その一撃に、さすがのロナウダも左手で顔を守るようにしながら、のけぞった……だった。彼は平然と先程同様に立つと、顔の前に持ち上げていた左手をそっと開く。そこには綺麗のままの弾頭が一つ。

「ふーっ、危ない危ない。日本では珍しいんじゃないのかな？ 今時こんな大口径の弾を使うなんて。これまで遊びに来た連中は小口径か拳銃、弾ばかりだったよ」

そう言ってロナウダは弾頭を中指と親指で摘んで逆さにし、そこで指を弾くような動きを見せる。弾頭はその尖った先端を下にし、綺麗にロナウダの手の平の上でコマのように

回り始めた。

「お前のような連中と当たる時は割と使えるのさ。小口径じゃ、押しが足りないってことが過去にあったね」

松倉は言いながらも素早くマガジンを交換。声にはかすかに苦しさが混じっているようにユリには聞こえた。

「下で話したことの続きになるんだけど、このままこのお持ち帰りのセットをあげるから、帰ってくれないかな。君らの銃じゃロナウダを倒せないのはわかっただろう？」

「……どうかな」

「それじゃ君達の依頼主を教えてくださいれないかな。……いい加減バイトが殺されるのも面倒だし。死ぬ度に新人を改造するにも、埋立地と違って設備が貧弱だから、手間も時間もかかる上、成功率も低いんじゃないよ……」

……バイト？ と、思わずユリは呟いた。

「ああ、さっき君らが倒した三人だよ。アレは警備用に特別カスタムしたモデルだけど、所詮はただの学生のバイト。ワックは高校生以上の人々を幅広く受け入れ、若者達へ働く喜びを教えているんだ。……ただね、人間には限界ってものがあるからね。お客が過密する昼時や休日なんかのスタッフはちよつとだけ体を改造するんだ。……そうじゃなきゃ、日本のワックは世界最高の速さだと賞賛されないよ」

言われて、ユリは一般人として暮らしていた時を思い出す。高校の友達と連れだってワックへ幾度も行った。人でごった返す昼時ともなればパンクするのが当たり前だと思うのに、ワックの店員の動きは尋常なるレベルではなく、まるで機械のように……いや、機械以上に正確、精密、高速に客を捌き、バーガーを作っていた。

そして二分と待つことなく、注文した品が手元に来る。それも、完璧な形で。紙包装にくるまれたバーガー、揚げ立て熱々のポテト、何故か他で飲むよりも美味しいコーラ……。それらがどれだけ慌ただしい中であっても、毎回、そしてどこの店舗でも同じクオリティで提供される。

客でいる間は全てが当たり前のように思っていたが、その裏側を意識すると、ユリは驚嘆せずにはいられない。確かに、それら全ての手順がどれだけ効率的に考えられていたとしても、並の人間が可能とする仕事ではないはずだ。

人体改造を受けていたからこそ。そう言われれば思わず納得してしまう。

「お金が欲しいならワックでバイトをすればいい。銃を持って、人を殺して儲けようなんて良くないよ。もっと良い意味でピープルにコミットした、倫理的なビジネスをするべきだ。……大丈夫、年齢も性別も関係ない。ワックでは人材の教育には自信がある。ワックのシステムを信じ、たゆまない努力があれば、誰だって一流の店員になれるし、それによって地域社会に貢献し、その利益を還元することだって出来るんだ。どうだい、素晴らしい

だろう？ ああソフトも結構自由だから、学生さんとかにも好評なんだ。なあに一般店員用の術式ならあつという間さ。怖がることはない」

「化け物になる気はない。昔から無改造なのに、そう言われていたぐらいだしな」  
松倉の言葉に、……残念だよ、とため息と共に言っ、ロナウダが首を振った。そこにドラムマガジンを交換した武島が再び撃つ。大野も、それに続いた。

「いい加減やめようよ、無駄だってわかってるんだろう？」  
銃撃音の中、不思議と明瞭にロナウダの声がユリの耳に届く。

頭の中でおかしな違和感が生まれ、それが何であるのかわかった瞬間、熱くなっていた全身に鳥肌が立つ。

声が、後ろから聞こえたのだ。それと同時に武島達の銃弾を受けているはずのロナウダの姿が、なくなっている。

松倉達もまた慌てて背後を振り返ると共に銃口を向ける。ロナウダが、そこにいた。一瞬前まで目の前にいたはずの彼が、背後にいたのだ。

「まったく、懲りないね。おしおきが必要かな」

ロナウダが手にしていた紙袋からポテトを取り出した。Mサイズだ。

大野が撃つ。それに合わせるように、ロナウダもまた目にもとまらぬ速度で大野にポテトを投げつける。散弾とバラけて飛ぶポテトが空中で衝突。





空中のロナウダが両手を振った。ブオン、と風のようなものが辺りの路地を襲い、そして松倉と武島、そしてユリと大野もまた、目に見えぬ何かに襲われる。

それはまるで上空から振り下ろされた極太の鞭。とんでもない衝撃に全身が悲鳴を上げた。骨が軋む。脳天にも喰らったそれによりユリの鼻から鮮血が噴き出て、意識が飛びかかる。だが、飛びきらない。目の前が真っ黒になっただけだ。バシヤシヤと、血みどろの地面に松倉達が倒れた音が聞こえ、そしてユリもまた倒れる。

一拍おき、ビシヤリと音を立てて、上空からロナウダが着地した気配を感じる。彼は歩き、ユリのすぐ横で立ち止まった。

「大人しくお土産を持って帰ればいいものを。まったく。……お？ まだ生きているのか。少し距離がありすぎたかな。でもたくましいよ、若くて元気な証拠だね。……よし、それじゃ褒美にワックのハンバーガーの材料にしてあげよう」

まさか。ユリはひんやりとした地面に顔を付けたまま、そう思う。低価格過ぎるハンバーガー。その中でもコストがかかるパテと呼ばれる肉……まさか、アレは……。散々食べてきたアレは……まさか……。

「なあんでね、ワックのバーガーに使うのは安心安全、そしておいしいオーストラリア産の牛肉一〇〇%さ。昔はおかしな肉や公には出来ない混ぜ物を使っているなんていう酷い噂もあつたけど、全部嘘さ。ヒヤハハハハハ！ ロнауダは今ジョークに凝っているんだ。

「どうだい、面白かったかい？」

ねえねえ、とロナウダはクニクニとユリの頬を指で突いてくる。払いのけたいが、払いのけられない。体が思うように動かない。というより、差し迫った恐怖に追い立てられていなければとくに失神していることだろう。どうにかしないと殺される。その恐怖がユリの意識をかううじて繋ぎ止めているに過ぎないのだ。

指で頬を弄ばれる刺激のせいとか、暗かった視界がかすかに戻ってくる。だが、その直後にユリは見たことを後悔した。

すぐ脇でしゃがんでいるロナウダ。あの顔との距離、一メートル。不気味に分厚く、鮮血でも塗ったかのような唇とトナカイよりも赤い鼻、もっさりとした髪。恐ろしさしか感じない白く塗られた肌に、笑みで細まる濁った両目。そんな顔をした奴が、笑いながら自分を見下ろしている。まさに悪夢のような光景だった。

「どうだい、面白かったかい？……答えてくれないか。まあいいよ、折角生きながらえんだ、これからゆっくり地下室でいろいろ訊かせてもらうよ。……ん？」

ロナウダが何かに勘づき、自分の脇腹に意識を向ける。そこには……グロッドガン17の銃口。ポテトが刺さったままの、大野だった。

「くたばれ」

発射。ほぼゼロ距離で放たれた9ミリの弾丸がロナウダの脇腹を貫いた。真っ黒な血が、

脇腹と背中から嘖き出る。貫通した。

「ホッ?」

ロナウダがその衝撃に引つ張られるように、腰を上げる。大野、倒れたその姿のまま、連射。さらに一発、二発とロナウダの体に弾丸が喰らい付く。黒い血が、飛び散る。

「まだ動けたかい! ロナウダ・マジック!」

ロナウダが大野に向けて手の平を差し出すものの、その手、そしてその体は蹴り飛ばされるように横に吹っ飛んだ。その直後に、耳に痛い銃声。R P Kの連射。武島だ。

彼女は口、鼻、そして耳からも血を流しながらR P Kを肩に構え、撃ち続ける。

「ええあいつ!! ロナウダ・マジックス!!」

ロナウダは膝を突きながらも手を武島に向ける。するとそれだけでそこに目に見えない壁があるかのように弾丸が何も無い空間で碎けていく。だが衝撃自体はロナウダにも通じているのか、着弾の度にロナウダの腕が震えた。

傷口を見るに、ロナウダの体に喰らい付いたのは大野の弾三発と、武島からの一発か二発、その程度だったようだ。しかも、その傷口から溢れ出ていた黒い血は、白い煙と引き替えに止まっていくな。

黄色いジャケットに空いた穴から覗く赤黒い肌が、グジュグジュと音を立てて塞がっていくのががすかにユリには見て取れた。再生しているのだ。

「これは、油断したね。久々に自分の血を感じたよ。あれを喰らって平然と二人も攻撃して来られるとは……少し距離が開き過ぎて……」

「三人だ」

松倉の声が聞こえた時、ユリのすぐ近くでカッという何か金属が地面を跳ねる音。グレート。そう思うもののユリの体は動けない。死ぬ。そう思うと同時にそれは炸裂した。

ホウッ!! という、そのロナウダの甲高い声には驚きや怯みがあった。

ユリは声にならない声で悲鳴を上げる。眼をギュッと閉じていても入ってくる強烈な光に目が眩み、両耳に針を突き刺されたような痛みが走る。閃光発音筒だ。

目と耳が使い物にならなくなるも、ユリは自分の体を誰かが引きずるのを感じる。

「大野、武島、スモーク! 何でもいい、手持ちを全部使え!! 逃げるぞ!!」

耳鳴りのする中で、壁を一枚挟んだように聞こえる松倉の声。発砲音も聞こえる。

カランカランと金属の何かがアスファルトを転がる音と共に、それからガスか何かが噴き出ているようなシューっという音。そして……。

「ヘエアハハハハハハハハハハ!! これは、やられたね!! 君達を甘く見ていたみたいだ。もう油断しないぞ、次に会う時は初めからロナウダ・マジックスを使ってやる! ヘエアハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

狂ったようなロナウダの笑い声。いや、ピエロというのはそもそも、そんなものかもし

れない。おかしな格好をして、おかしなことをして、それでずっと笑っている。それが、ピエロというものだろう。考えてみれば何と気味が悪く、恐ろしい存在か。  
きつと二度とピエロで笑うことはないだろう、ユリは誰かに引きずられながら、そんなことを考えていた。

## 4

ユリの目と耳がようやく正常さを取り戻したのは長い時間を置いてからだだった。というより、目が使い物にならず、耳鳴りによって頭痛が続いていたせいもあって、寝かされていたベッドの上で大人しくしていたらいつの間にか眠ってしまったっていたらしかった。

目を覚ますと、そこは見知らぬ病院らしき場所。まだ頭の中でキーンという甲高い音が鳴り響いていたが、顔をしかめるほどのものではない。

ユリはベッドを降りて、カーテンを開けた。ビルの間から顔を覗かせる太陽が、燦々とした光を室内に送り込んでくれる。白い空。気持ちの良い快晴。だからだろうか、ユリは昨日の全てが悪い夢であつたかのような印象を覚えた。

だが装備を取り外されただけの己の姿を見て、それが夢ではなかったのだと実感する。血に染まった服、髪も血で肌にごびりつき、口の中には嘔吐の名残の嫌な味が残っている。

る。昨夜失禁したせいとか、下着はまだ湿っていて、臭いもかなり酷いことになっていた。

寝かされていたベッドがやけに蒸れると思つたが、明るくなった今になって見てみれば、なるほど、当然だ。ベッドカバーのようにブルーシートが敷かれていた。

四人部屋らしい、そこ。使われているベッドはユリのだけ。しかも今時の病院にはあまりに何も無い。ベッドの他には互いを区切るカーテンと、ベッドごとに備え付けられた棚だけであり、病人や怪我人を寝かせておくための最低限のもの、といった趣だ。

「SA58がない……」

ユリはふと、それに思い至る。昨夜フラッシュグレネードを喰らって意識も飛びかかたとはいえ、銃を捨ててはいないはずだ。というよりスリングでぶら下がっていたのだから、途中で落としようがないだろう。

ベスト等もないので、恐らく松倉達が回収したのだ。よくよく考えてみるとあの銃は違法品、病院に入れるにしてもそんなものを持たせておくわけにはいかなかったのだろう。

せめて顔を洗いたい。ユリはそう思い、痛む全身を引きずるようにして病室を出る。

病院らしい、病院。そんな場所だ。ただし、平成かその前の時代のドラマで見るとような簡素なイメージの廊下である。不気味なほど静かだった。

そんな中に重苦しい足音が聞こえる。振り返ってみれば、思わずユリはゾクリとした。ガスマスク、そして要所要所にプロテクターを装着した上でSPAS12を持つた巨漢と、

血しぶきを浴びた白衣をマントのように肩に掛けた赤毛の男。いや、顔を大きな医療用マスクで隠しているのだからわかりにくいだが、その異様に鋭い目元には化粧つ気があり、組んでいた腕を解いた瞬間、胸元に豊かな膨らみが現れた。女だ。

歩み寄ってくるショットガンを手にしたガスマスクの巨漢が、銃口をユリに向けてきた。だが、女医が手を挙げてそれを押しとどめる。

「松倉のところの新人か。意識を取り戻したようだが、どうだ、こちらの声が聞こえるか」ユリが頷くと、女医はその場でユリの両耳の機能を確認し、そして全身くまなく撫で回し、どこか痛むかどうかを尋ねてくる。

「……ふむ、打撲はあるが、基本的に問題ないな。骨に異状はないのは確認している。退院だ。金は前払い分のみでいい」

「あの、ここと……」

「望んで死にたがる連中が死にたくないと思っ場所だ。……どうした、記憶障害か？　うちの専門外だ、他へ行け」

何を言われているのか、そして自分がどういう状況なのか、それを理解出来ずユリは困惑したまま女医の目を見つめた。優しい言葉を掛けてくれることは期待していなかったが、それでも答えをくれると思ったからだだった。

「何だ、簡単過ぎるから金を返せ、か？　うちは追徴するが、返金はしない。そういう契

約になっている。わかったら出て行け」

予想もしていなかった冷たい言葉に、ユリは「あの」と慌てて食い下がろうとするのだが、女医はもはやユリを見てもいなくなった。傍らを通り過ぎ、背中を見せる。

「お前は一人で立てる足があり、武器を持てる両手がある。戦える者はここに理由はない。警備、連れて行け」

巨漢がここの警備だったらしい。ユリはいきなり腕を捻り上げられ、そのままエレベーターに押し込められた。その後はショットガンの銃口を背中に押しつけられ、玄関から追い出されたのだった。血がこびり付いたジーンズにシャツ姿のままだ。

どうしていいのかわからず、ユリはその場で五階建ての病院……らしき建物を見上げた。どこにも病院の名を掲げた看板がないため、一見では何なのかわからない。ちょっとした公民館のような施設か、国の補助金を持て余した田舎の学校のような印象である。

そんな建物の四階の窓に、先程の女医がいるのをユリは見つける。彼女はマスクを外し、赤いルーージュを引いた唇を見せていた。

怖気を震うような美人だったのだと、その時になってようやく知れた。

彼女はユリと目が合ったのを察したのか、小さな口をへの字に曲げ、興味なさげに窓から離れてしまう。

そうして……辺りから人氣は完全に消え失せた。

何時なのか、病院前の通りには車も走っておらず、胸が苦しくなるような寂しさだけが空間を占めていた。背の低い雑居ビルや、今にも崩れそうな古びた民家が乱雑に並んでおり、人の営みを感じはするが、人自体はどこにもいない。

「どうしよう……こんな格好で、お金もないし」

全身、血みどろである。乾いているので多少はマシになっているとはいえ、その分臭いは酷かった。ユリ自身がそう思っているということは、他人からしたらもっと凄いのだろう。ジーンズの中に至っては、まだ湿っていて、歩く度に嫌な感触がした。

警察に行くべきか否かもわからなかった。携帯ぐらいあれば良かったのだが、そんな贅品は今のユリには縁がない。

ユリは人気のない道を歩き始める。あの医者と言ったように、全身の至るところが痛むが、それだけだ。体の機能に問題はなさそうだった。

人のいない、道。東京ではないのだろうか。ユリが知っている東京とは、少し違う気がする。他県のようなだった。

ここは、どこだろう。今、何時なんだろう。自分は、何をしているんだろう。

このまま歩き続ければ、今までは違う人生を歩めるような、そんな気がしてしまう。今、自分の身分を証明出来る物は何もなく、自分の身分を知る人もどこにもいない。

このまま逃げれば借金も昨夜のような戦いも、何もかも捨て去れるんじゃないか。そん



なことを考えてしまう。

借金の額が額だ。追ってくる。ただ、自分を追うよりは両親を捜した方が彼らにとって  
は確実のはず。それとも例の保険金のためにやはり自分を捜し出し、そして殺すのらう  
か。それはそれで確実か。

しかし、でも、だとしても……逃げられるかもしれない、という考えはユリの中で酷く  
甘く、彼女を誘う。

昨夜の戦いはもはや自分の手に負えるものではない。何より、あの血の海で首が曲がっ  
てもがいていた店員の奇怪な姿の記憶が、ユリの心の中でジクジクと膿む。

戦えるか否か、というより、あんな姿のものであっても自分は殺せなかった。それでやっ  
ていけるものなのか。ならばいっせ、もうこのまま……。

だが、いいのか。それで済むのなら、とっくにそうするべきだったんじゃないのか。散々  
今まで踏ん張ってきたものが、意味を失くす。両親が消えてからの孤独も何もかも、全て  
を無駄だったのだと、認めなくてはならない。

繰り返す自問自答はユリの頭を重くし、胸を苦しくした。

言いようのない徒労感を覚えたユリは、雑居ビルの間にある人が一人通れる程度の細く、  
薄暗い路地に身を滑り込ませる。壁に背を預けると脱力するように、しゃがんだ。

どうせ誰もいないのだからと歩道の上に座るのは、何となく嫌だった。少しでも何かか

ら隠れていたい、そんな気分だった。

眼を閉じる。暗闇の中、腐臭に似た臭いが鼻を突く。頭の奥で響く甲高い音。痛む体。

湧き起こり続ける自問自答。そこから生まれる徒労感。

車輪の中を走るモルモットの気分だった。狭いカゴの中、生殺与奪の権を握られな  
がら、必死に生きようとして走り回るも、車輪だけが空しく回り続けている。

死が、車輪を回せと……ユリに、もがけと強いている。

眼を開けた時、ユリは頬を冷たいアスファルトに押しつけていることに気が付いた。薄  
暗い。ハツとして顔を上げてみるも、昨日のあの路地裏ではなく、人が一人通れるだけの  
細いビルの間。そのことに、ユリは少しホッとした。どうやら眠っていたらしい。

起き上がってみると、驚いた。先程まで人がいなかった通りを、大勢の人が歩いていて  
白昼夢でも見ている気分だ。

ユリが啞然として歩み行く人々を見てみると、ふと、あることに気が付く。青い空、そ  
して太陽が上にあっただのだ。

よくよく考えてみるとユリが病院の窓から見た太陽はビルの隙間から差し込むようなそ  
れ。空も、白かった。夜明けだったのだろう。だから、そんな時間だから、人がいなかっ  
たのだ。そして今は、昼なのだ。



同じ場所でも時間が違えばこんなにも違うものなのか。ユリはそんなことを思う。また、彼女は歩き出した。道の端を、ビルの壁に身をこすらせるように、少しでも人目を引かないように、俯うつむいて。誰も声は掛けてこなかった。

大きな通りに出ると、地名が記された看板を見つけた。どうやら足立区あだちく内らしい。となれば、地理はわからないが、徒歩で詰め所に戻る距離のはずだ。

ユリは通りを行く人に声を掛けようとするものの、皆、彼女を避けた。怪しげに汚れ、相対に臭いのだから当然か。ユリは傷つくより先にそんなことを思い、また、歩き出す。

「……あれは……」

大きな通りだったのだ。ないわけがない。——ワツクの店舗である。

時間帯もあってか、その二階建ての独立型店舗の前には外まで行列が伸びていた。

ユリは足が震えるのを感じながらも、歩み寄らずにはいられない。怖い、だが、見てみたい。そう思った。

窓を壁とするようにした一階の造り。開放的なそれは外から中を覗のぞくのに丁度良い。

カウンターの前に並ぶ大勢の人々。それらの注文を笑顔で聞き、素早く捌さばいていく男女の店員。次々に作られ、客の手にやってくる注文品ペーパー。

意識して見れば一目でわかる異常さだった。その仕事振りは確かに人間の為せる業ではない。気持ち悪くなるほどに円滑で、素早く、的確だ。そして何より全員の笑顔が崩れない。

い。それが一番、ユリには不気味だった。  
「笑顔って、こんなにも怖いものだったんだ……」  
人は笑う。面白いから、楽しいから、幸せだから……人は笑う。  
だがシリアスな場での笑いがあるとすれば、それは狂気だ。何か違う、共感出来ないが故に異常さを感じずにはいられない。

これだけ修羅場シロバとなっている店舗内で笑顔を絶やさず、崩さず、仕事を迅速にこなしているのは、果たしてまともなのか。  
昨夜のロナウダの言葉は、恐らく本当なのだろう。当たり前のように働いている彼らはいき……。

近くにあった交番から視線を感じ、ユリは逃げるように、しかしそれとなくその場を立ち去った。この格好ではさすがに目立つようだ。  
大きな通りから少し離れると、公園を見つけたので、そのトイレで顔と髪を洗った。

血の汚れはなかなかしつこいが、ハンドソープをありったけ使って、気合いで落とす。これで多少マシな見た目になったはずだ。これならば……。

ユリは人に避けられ続けた先程までのことを胸の奥に押しやり、前向きに考えた。  
「あの、すみません。道を訊きたいんですけど……いいですか？」

ユリは公園の隅っこのベンチに座っていた老人に声を掛けてみる。服装から察するに、

恐らくホームレスの類なのだろう。同じぐらいに薄汚れた格好だから、というわけではないが、何となく話しかけやすい雰囲気があった。

「いいよ。……どこへ行くんだい？」

老人は優しげに髭だらけの顔で、微笑んだ。ロナウダのそれとは違う、人間らしさを感じる笑み。しかし彼の言葉に、思わずユリは考えてしまう。

「どこ……。さあ、どこに行つたらいいのか……。実は、わからなくて」

あはは、とユリは思わず笑う。老人も笑った。彼の隣に座ってみる。

老人は動かさず、喋らない。先程微笑んでいたような表情も、今は髭に埋もれ、よくわからなくなっていた。

公園には他に人がいないせいか、どこかその中だけは時間が止まっているようなおかしな印象をユリは抱く。木々に囲まれ、古びた遊具が並ぶだけのさして広くもない住宅街の一角にある公園。少し歩くだけで先程までの太い通りに出られるのだが、その音だけが遠くに聞こえるだけで、それ以外の音もない空間だった。

「……まだ、若いね。学生さんかい？」

「高校生です、一応。……あ、今日って月曜日かな。無断欠席だ」

やっちゃいました、とユリは笑い、老人もまた、笑う。

「迷うこともない年齢だろうに」

「迷うことに年齢って関係あるんですか？」

「死<sup>シ</sup>が迫<sup>オソ</sup>ってくる、人は迷う。これで良かったのか、このままでいいのか、今からでも何か出来ることはないか……。様々なことを考える、という方が正しいかもしれないがね。……デスニードラウンドの話を知っているかな？」

少し前までそのことを考えていたユリは、思わず驚きながらも、頷く。

「あれにはいい教訓がたくさんある。どの作品も素晴らしい物語だし、魅力的なキャラクターがいて見る者を魅了するが、私はその根本となった話にこそ、価値があると思う。迫り来る死から逃げようとして車輪<sup>サイレントホイール</sup>の中で走るネズミが楽しい夢を抱く、という設定にね」

あのテーマパークの根源は老人が語るように何らかの実験に使われるモルモットの見た夢、という設定だ。そのためデスニードラウンドのマークは車輪を回すネズミのそれである。大きな車輪を中心に左右に歯車のように連動する小さな車輪が一つずつ。

「そう、ですか？ あれって、結構空しいっていうか、ちょっと怖いですよ。死から逃れようとしても逃れられず、その恐怖から逃れるために夢を見るっていう設定は……」

「傍<sup>たが</sup>から見ると空しいかもしれないが、しかし、ネズミ自身はそうは思っていないだろう。だから、走り続けているし、夢を見ることが出来るんだ。どうせ死ぬのだと飼育ケースの隅で、全てを悟り、ただただ死を待つだけのネズミは楽しい夢を見ることなんて出来はしない。そいつはその瞬間に死んだんだ。自殺に等しい。……走るからこそ、無様にて

もがいているからこそ、夢を抱くことが出来る。生きることが出来る。」

その老人の言葉は、ユリにもわからないでもなかった。確かに何もせずに両親が帰ってくるもののだと思い、借金取りに追い立てられてばかりの時は毎日がただひたすらに苦しかった。重しを着けて水の中に沈められているような気分だった。

だが、その後アルバートの所で教練を積んで、山田と出会ってからは状況は同じでも気持ちは明らかに変わっていた。

水中で息を止めているのは変わらない。だが、沈んだまま水面を見上げていた以前とは違い、生き方を選択してからは水面に向かって泳いでいるような気分だった。

頑張れば、もう一掻きすれば……！ そう思えたり、そう思うことで確かに気は楽になっていた。夜中に押し潰されそうな恐怖に目を覚まし、叫び泣くこともなくなっていた。

「アンタ、松倉んトコの新人か何かかい？」

「え？ ど、どうして……。はい、新人っぽい……なんか、です……」

「この辺りで、そんな格好と臭いで彷徨っているのはどうせ奴が関係しているからね。被害者か仲間か、大体どちらかだ。……同業にはわかるさ。昔の、だが」

そう言っただけ老人はそれまで微動だにさせていなかった右手を持ち上げて見せた。銃を撃つのに絶対に必要な指が——人差し指と親指が、なかった。

「……け、結構、いろんなところにこの職業っていうか、関係者の人って、いるんですね。」

ごく一部の人のだけかと思ってました」

驚きのあまりに声が震えたが、何とかユリはそれを悟らせまいと、平静を装う。驚いてリアクションするのは少し恥ずかしい気がした。

「多くはないが、少なくもない。意識していなければ、気が付かない、そういうものだ。当たり前はそいつの当たり前であって、世間の常識ではない」

ワックのバイト然り、ピエロの笑顔然りということか、とユリは思う。意識して見れば確かに異常さに気が付くが、意識しなければ何かに気が付くことなくその異常な有様を受け入れてしまうものなのだろう。

あの病院も、そういうものなのかもしれない。看板もなく、不自然な重武装の警備員がいて、返り血を浴びた女医が歩き回り、患者を放り出すような病院……。

明らかに異常だ。

だが、もしかしたらそれは当たり前前にどこにでもあるものなのかもしれない。ただ、ユリが知らないだけで。

——ファンタジーは痛い程の現実を支える張りぼてだ。

山田の言葉が頭を過ぎった。案外に、当たり前のように感じていた。平和な日本の日常、というそれ自体が、ファンタジーだったのかもしれない。そして自分はそこでその夢を現実だと思ひこみ、何も知らないまま生活を続けていたのかもしれない。

世間の人は、アパートの二つ隣の部屋の住人のことをどれだけ知っているだろう。毎日歩む街にある古びた中華料理屋の味を知っている人がどれだけいるだろう。銃を持って金を稼ぐ人が当たり前前に近くにいることをどれだけの人が認識しているのだろう。

何もかも張りぼてだけれど、きっと誰も彼もがそれだけを見て、それだけを信じて、当たり前前に生きてきているのだろう。

「……しかし、学生で銃を持ったか。ワケ有りだな」

「親が借金抱えちゃって、それで……」

「それだけかわいらしい顔をしているということは、体を売っても賄えない額だから、命を売るしかなかった、か」

「ありがとうございます。……最初は大きく稼いでやろうってバカみたいに思ってたんですけど、何か、保険金とかかけられているみたいで……。今のところかろうじて生きてますけど、飼育ケースの中って感じです」

ユリは冗談のつもりで言ったのだが、老人は表情を微動だにせず、最初に見かけた時のまま、眠るように穏やかに、前だけを見つめていた。

「飼育ケースの隅で座り続けるか、それとも車輪を回すか。二つに一つ……」

「やっぱ、そのどちらかしか選べないもんですかね」

「アンタじゃなくとも、人生ってのは、案外そんなものだ」

ユリは一頻り<sup>ひとしきり</sup>考えた後、ちよつと、笑った。

「……前向きさだけが、取り柄なもので」

座して死を待つのは、やっぱり違う。そう思った。何より、山田の所へ行く前のような毎日を送るのも、嫌だった。

やはり夢は、希望は、あった方がいい。状況が何も変わらないのだとしても。むしろそうであるのなら、尚更だ<sup>なほさら</sup>。

もし結末が同じであるのだとしても、せめてその時までには精一杯に走っていたい。生きていたい。

ユリはベンチから立ち上がった。

老人が詰め所までの道を教えてくれる。さっきの大通りを南下するだけ。案外に近い。札を言おうとしたが、老人はそれを遮る。

「……もし逃げるのなら、群馬まで行くといい。あそこにはまだ火だねが燻<sup>くすぶ</sup>っている。身を隠すには悪くない。銃を扱える者を必要とする組織もあるだろう」

覚えておきます。ユリはそう言い残して彼に背を向けた。

だが、すぐに振り返って彼に名を尋ねる。

老人は最初会った時のままに、眠ったように動かなかった。返答も、なかった。

ユリはまた、歩き出した。

詰め所に戻ってきたユリは外からシャッターを手で押し上げてみる。鍵はかかっていない。ギャギャアと怪鳥が絞め殺されるような音を盛大に出すシャッターなので、案外必要のないものなのかもしれない。

「……うああ……」

ユリは足を踏み入れた瞬間、さすがに顔をしかめた。転がる大量の空き缶、ツマミの袋、そして武鳥だ。

「どうやったら、一人でこんなに散らかせるんだろ」

うつ伏せに倒れ、飲み潰れているらしい武鳥とゴミを避けながらユリは自室に戻る。そのまま自分も倒れてしまいたい衝動を抑え、着替えを手に、シャワールームに向かった。

熱い湯を浴び、体中についていた血糊ちのりを落とす。口の中も洗った。そして着ていた物全てをゴミ袋に放り込んで、ようやく一息ついた。

小綺麗になった己を脱衣場の鏡で見やる。

体の至るところにアザはあったものの、元気だ。まだ、あがける。車輪サイレントホイールは回すことが出来る。夢は、いくらでも見られるはずだ。

「おっし、やるか!」

ユリが最初に行ったのは、まずはいつものように詰め所の掃除だ。

一体どういう飲み方をしたら、この広い空間の隅々にまで空き缶を散らすことが出来るのだろうか。毎回ユリが自室で寝て起きたら同じような有様になっているのだ。

武鳥に酔いが回り始めるまではユリも着意さかかさせられなかったり、話し相手をさせられたりもするものの、毎度適当な頃合いころあに自室に逃げ込むため、その後、武鳥が一人で何をしているのかは知らない。ただ、深夜に「キ————ンッ!」という武鳥の声と共に、ドダドダと走り回っている音を何となく聞いたような気がするが、定かではない。

今度武鳥が飲み始めた時にこっそり様子を窺うかがってみよう。

そんなことを考えながら空き缶を拾っていると、武鳥が「んが……」と呻うないた。

「あ、武鳥さん、いいですよ、そのまま寝ていて。私が片付けておきます……うああ……」  
振り返ったユリの視界の中で、武鳥が寝ながらゲロを垂れ流していた。

それを見ていると、病院を出てから詰め所に戻ってくるまでの全てこそが白昼夢だったような気がした。あのフワフワとして、世の中の舞台裏を覗き歩いたような、そんな時間は全て夢だったのではないかと。

寝ゲロする女の夢なんてあるわけがない。そう考えれば、少なくとも、こっちは紛れもない現実のはずなのだから。



最後まで立ち読みしてくれて  
どうもありがとう！  
続きは本で楽しんでね！